ヤギ草プロジェクト -second season-

ーヤギ除草隊-YJST-ー

代表者　　西田照（共獣Ｂ６年）
構成員　　井上夏梨（共獣Ｂ６年）伊豫岡凌平（共獣Ｂ６年）河村梨央（共獣Ｂ６年）
土田悠梨（共獣Ｂ６年）大塚有紗（共獣Ｂ２年）
重本佳音（共獣Ｂ２年）宮津陽太（共獣Ｂ２年）
三輪祥大（共獣Ｂ２年）岸田獅道（共獣Ｂ１年）
宮本桂太朗（共獣Ｂ１年）

１．「ヤギ草プロジェクト」とは

本プロジェクトはヤギによる大学構内の除草を目的としたプロジェクトです。昨年度のおもしろプロジェクトにおいて，農学部附属農場内 2 カ所，農獣棟中庭，東門付近の草地，アーチェリー場付近の草本調査を実施し，有毒植物や動物に中毒を起こす植物がないかを確認しました。また，学内の方に身の回りの草について興味を持っていただくことを目的として，草図鑑を作製しました。そして，今年度は，実際にヤギを草の生えている場所に連れていき，ヤギ除草を本格的に開始しました。

２．ヤギ草プロジェクトの目的

本プロジェクトの目的は，山口大学構内の除草をヤギ除草で行うことで環境にやさしい山口大学を目指すことです。ヤギによる除草は，刈り取った草の廃棄の必要がない，電力が必要ない，除草剤を使わないため生態系への影響が少ない，などの理由で近年様々な場所で実施されております。草はどこにでも生えるもので，山口大学の構内も例外ではありません。山口大学共同獣医学部にもヤギが 2 頭いることから，大学構内でもヤギ除草が行えるのではないかと考えました。

３．ヤギ草プロジェクト　ヤギ除草に向けて

2024 年 6 月におもしろプロジェクトに採択していただき，そこからヤギ除草への本格的な準備をすすめました。ヤギに安全に除草してもらうためにしないといけない準備はたくさんありました。まずは除草場所の決定です。ヤギにとって初めての除草であることやヤギと柵の移動距離を考えて，本年度はまず農学部付属農場内のため池 3 から除草を始めさせていただくことにしました。その場所でヤギ除草を行うために，学生支援課や農場の皆様に何度も時間を割いていただき，話合いを重ね，ヤギ除草中は見守る人をつけること，ヤギ除草は草がある 11 月までとすることなど，ヤギ除草をキャンパス内で行うための具体的な方法やルールを決めました。また，それに伴って，除草用の移動式の柵などの必要な物品を購入していただき，ヤギ除草のための準備を行いました。いよいよ柵を除草場所に建てることになったのは 8 月初旬でした。柵を除草場所まで運び，建てていくのですが，結構な重労働，そして，暑さ。熱中症にならないように休憩もはさみながら，少しずつみんなで協力して頑張って柵を準備しました。柵の準備が終わった後は，除草区域内に有毒植物やヤギが中毒を起こす植物はないか再度確認し，ヤギの休憩用のパラソルなどを準備しました。

柵の組み立て

柵の設置完了

４．ヤギ草プロジェクト　ヤギ除草開始！と思いきや…

柵の準備が終わったのは 9 月頃でした。柵の準備は完了し，あとはヤギを連れて行くだけでした。山口大学にいるヤギは 2 匹で，体が大きい方が雄のコメくん，小さい方が雌のムギちゃんです。2 匹はいつも一緒なので，除草場所まで移動するときも 2 匹一緒なら除草場所まで移動できると考えていました。しかし，そうも上手くいきませんでした。ヤギと一緒に除草場所まで徒歩 3 分くらいの距離なのですが，ヤギが途中で立ち止まって元のヤギ小屋に戻ろうとしてしまいました。普段は歩くことのない道だから嫌なのではないか，歩き方が気に入らないのではないか，どうして上手くいかないのかメンバーで頭を抱えて悩みました。しかし，ヤギの安全が第一で，焦らずヤギにも少しずつ慣れてもらおうということで，ヤギ小屋の前を一緒にくるくると散歩する練習から始めました。集中講義や実習などで時間が制限される中，少しの時間でも集まれる人でヤギと一緒に歩く練習をしました。また，ヤギの歩く道を作ってあげることで歩きやすくなるのではないかというアドバイスをいただき，段ボールでヤギの周りを囲んで進む段ボール板を作製しました。試作品を作って試してみるとヤギたちも歩きやすかったようで，練習していくとスムーズに歩いてくれるようになりました。また，逆にヤギたちが走ってしまう時にはヤギも私たちも危ないので，ヤギの前に板を置きながらゆっくり歩くためにも使えるということが分かりました。段ボール板自体も軽量化や補強をして，自分たちもヤギに合わせてスムーズに動けるように工夫しました。

コメくん（奥）とムギちゃん（手前）

段ボール板を使うことでスムーズに移動

ヤギが走らないように段ボール板を前に置いて移動

５．ヤギ草プロジェクト　念願のヤギ除草

ヤギと一緒に除草場所まで行けるようになったため，いよいよ除草を開始しました。始めは 30 分，そこから少しずつ時間を伸ばしていきました。季節は秋になり，少しずつ日の入りの時間も早くなってきていたので，暗くなる前にはヤギをヤギ小屋に連れていけるように気をつけながら，授業や実習が終わり次第集まって 1 時間程度の除草もできるようにしました。ヤギは除草場所に着くとおいしそうに草を食べてくれました。特にコメくんは除草場所に着くなりむしゃむしゃと草を食べ始めます。ムギちゃんは除草場所に着いてすぐは近くにいる私たちにすり寄ってきたり，コメくんのことを見たりしていたのですが，そのうちコメくんと同じように草を食べ始めました。ヤギもそれぞれ性格が違ってかわいいですし，おいしそうに草を食べている姿を見られることが何よりうれしく，今まで頑張ってきてよかったと感じました。11 月までため池 3 のヤギ除草を行い，本年度の活動は終了しました。その後，柵の片付けを行いました。

草を頬張るコメくん

除草するヤギ

６．ヤギ草プロジェクト　2024 年度総括

山口大学のキャンパス内でヤギ除草をする，という目標を掲げ，昨年度に引き続き 2 年に渡って活動してきたヤギ草プロジェクト。ヤギに除草を手伝ってもらうにあたり，事前にさまざまな準備をしましたが，ヤギと除草場所に行くことに苦労した時期もあり，実際に始めてみると想定外の壁に何度もぶつかりました。しかし，そんなときもみんなで意見を出し合い，協力し合って，今年度も楽しく活動をすることができました。

構想期間を含め，ヤギ除草の実現に向けて多大なるご協力を賜りました自主活動ルームの石井様，学生支援課の皆様，農学部付属農場の皆様，ヤギ除草のために除草場所を準備してくださった皆様，共同獣医学部の皆様，このヤギ除草にご協力くださったすべての皆様方に対して，改めてヤギ除草隊一同心より感謝申し上げます。
本当にありがとうございました。

山口大学野良猫０プロジェクト～山大にゃんこ大作戦フェーズ２～

－山大にゃんこ大作戦－

代表者　　前原光主穂（共獣Ｂ５年）
構成員　　大和美海（人文Ｂ４年）本多紗弥華（共獣Ｂ２年）西本美晴（共獣Ｂ５年）
石田千穂（共獣Ｂ５年）宮﨑優衣（人文Ｂ２年）
吉永陽水（人文Ｂ２年）和泉川日菜（農Ｂ２年）
清原鈴音（共獣Ｂ２年）川村文乃（共獣Ｂ２年）
梅岡翔太（農Ｂ２年）上川あゆみ（理Ｂ１年）
板垣潮（経済Ｂ１年）本永悠太朗（農Ｂ１年）
古田瑞葵（共獣Ｂ１年）西村真央（農Ｂ１年）
野尻祐衣（共獣Ｂ１年）前木香花（人文Ｂ１年）
岩崎璃美（国総Ｂ１年）五十嵐希望（経済Ｂ１年）
杉山音和（国総Ｂ１年）妹尾櫂（農Ｂ１年）
高山久遠（農Ｂ１年）大熊誠人（経済Ｂ１年）
加藤泉水（共獣Ｂ１年）山本茉央（農Ｂ１年）
有働綺芽（人文Ｂ１年）高畠惇（教育Ｂ１年）
森野羽菜（経済Ｂ２年）堤風登（医学Ｂ１年）
徳永菜月（農Ｂ１年）天野真裕（国総Ｂ１年）
福田凰芽（農Ｂ１年）濵田凌佳（教育Ｂ１年）
太田大斗（経済Ｂ１年）
他１８名

１．プロジェクトの概要

山口大学吉田キャンパス内に生息する猫について，山大にゃんこ大作戦が主体となって，猫に関わりを持つ関係者をはじめみんなで考えていけるような環境をつくり，猫の適切な管理体制の確立を目指す。これにより，吉田キャンパス内で見られる猫に関するトラブルを解消するとともに，むやみに新たな野良猫を住み着かせることなく，野良猫ゼロに向けた取り組みを行っていく。

本キャンパスでは昔から野良猫が可愛がられてきた。しかし，エサやりが過剰になるにつれ，住み着く野良猫は増え続け，さらに繁殖のコントロールを行わないことにより，次々と子猫が生まれて数が急増していき，一時期には 60 頭以上にもなった。糞尿被害などを訴える声も増えてきたほか，望まれない死を迎える猫も後を絶たず，人にとっても猫にとっても悪循環となっていた。

おもしろプロジェクト’18 を機に山大にゃんこ大作戦が発足し，猫へのエサやりの状況調査から始まり，TNR（不妊処置）や譲渡活動などに尽力してきた。現在キャンパス内には 29 頭（プロジェクト開始当時）の猫が 6 か所ほどのコロニーを形成して生息しており，全頭 TNR が完了している。頭数は減少傾向に転じたものの，まだまだ多くの猫がおり，排泄物の掃除が不十分なことで深刻な糞尿被害に困っている人がいる。また，過剰・不衛生なエサやりも不特定多数続いており，環境や猫にとっても不適切な行為であるだけでなく，新たな野良猫が次々に住み着く可能性が高い。よって，排泄物の処理やエサやりの管理などを含め，猫の管理についてより良い方法を見つけていく必要がある。

こういった野良猫の問題は地域の環境問題として，関係者をはじめ多くの人で取り組んでいくことが友好的かつ効果的な解決に必要である。しかし，猫についての管理どころがないため，各関係者が話し合う場がなく猫への対応に基準もない。結果，エサやりをしないよう掲示をする側とそれでもエサやりを続ける側とで，対立した行動をとっている状況が続いている。そこで，頭数のコントロールを行ってきた山大にゃんこ大作戦が，自分たちでも実際に給餌と掃除の管理に取り組みながら，エサやりをしている人と施設管理者など，猫についてコンフリクトが起きている両者の間をとりもち，みんなで一緒に猫の管理について考え取り組んでいく環境を作ること

を目指す。
　今年度は, 当団体が給餌と掃除を管理するエリアを一つ拡大し, 工事に伴う生息エリアの移動にもトライした。外部からの野良猫の侵入についてはこまめに調査を続け，やむなく住み着きつつあった 1 頭については TNR を検討・実施した（最終的に譲渡)。掲示や立て看板等で積極的に周知を行い，留学生なども含めより広く周知を行うために英語のポスターも作成した。その他，学童保育の子どもたちとの触れ合いを通して猫のことを知ってもらったり，講演会の内容を収めたガイドブックにこれまでの活動の記録を加えてリニューアルしたりなど，啓発につながる活動も行った。さらに，キャンパス内の猫についての交流会を企画し，関係者みんなで話し合える場を設置した。

２．活動内容

２．１管理エリアの拡大とエリア統合をトライ

　昨年度より 1 つ目のエリア（ふようロード）で 3 頭の猫の管理を行ってきた。今年度は，7 月中旬より 2 つ目のエリア（体育館裏/音楽棟）の 5 頭の管理を開始した。体育館裏エリアを選んだ理由は主に 2 つある。1 つ目はふようロードと近く極端に労力が増えないことである。2 つ目は体育館・音楽棟周辺の長期工事が始まり，工事現場や猫の安全性を考え，5 頭の生息エリアの移動を試みるためである。さらに，生息エリアの移動先としてふようロードを設定し，2 エリアの統合を試みた。

活動ハイライト：給餌管理

活動ハイライト：掃除

（事前の合意形成）
　大学のエリア管轄部署に事前説明を行い，給餌管理をすることへの理解を得たうえで活動をスタートした。また，そのエリアで以前よりエサやりをしている人とやり取りを行い，当団体へ給餌管理を任せてもらうことへの理解を求めた。本来であれば，大学関係者とエサやりさん，その他関係者とで一緒に話す機会を作り，お互いの立場や猫の状況を共有し，猫の管理について一緒に考え徐々に調整していく形が望ましかったが，工事の日程がせまっていたことや，そういった場を設けることへのエネルギーや不安も大きく，この時は当団体と双方との間でそれぞれ 1 対 1 のやり取りとなった。活動開始時には不十分な合意形成プロセスとはなったが，後述する”キャンパス内の猫についての交流会”を開催することができ，今後の活動展開において十分な合意形成プロセスとなり得ると思われる。

（エサやりさんや関係学部とのコンフリクト）
　事前に理解を得たうえで活動を始めたものの，いくつかの課題に直面した。例えば，エサやりさんとの折り合いが難しかったり，付近の施設関係者から猫の糞尿による被害が大きいことが分かったり，そのために最初は給餌管理という活動への不信感も大きいようであったりといったことである。

- エサやりさん

　エサやりさんとの間では，主に給餌・給水の仕方について問い合わせや苦情が寄せられた。動物病院への健康状態の相談や投薬などについての問い合わせもあったり，また，だんだんと言葉が感情的・攻撃的となってしまったりした。その結果, その後もしばらくエサやりが続いてしまっていた。こういう状況が起きてしまったのは,

事前の十分な話し合いがなく，活動への理解を求めるよう一方的な要求となってしまったためである。エサやりさんとしては，これまで自分で可愛がってきた猫たちの世話を急に止めることは難しいし，”管理”と”お世話”という感覚の違いもすんなりと受け入れられるものではない。すべきと分かっていた十分な合意形成を避けてしまったことは反省点である。

- 関係学部

また，掲示や猫の移動に関して付近の学部に相談をした際にもすんなりとはいかなかった。まず，昨年度は活動を始めたてということもあり，当団体が給餌管理していることや団体以外のエサやりは止めてほしいとはっきりと明言した掲示は，それほど広く行ってこなかった。しかし，今年度は管理エリアが広がり，給餌をしている活動が人目につくことも増えてきた。過剰，不衛生なエサやりを誘発しないために，「当団体が管理しているからエサやりをしないで」という趣旨の掲示を積極的に行った。掲示場所の許可をとるために学生支援課を介して担当学部に相談をしてもらったところ，5 頭の猫が集まっている音楽棟利用者からは，糞尿の臭いのために換気もできなくて困っている，また，ふようロード近くには畑があり，そこの糞尿のことも気にかかっている，との声が寄せられた。その心配があるので，給餌管理についても不信感を抱いていることが感じられた。不衛生なエサやりを制御し，糞尿被害などを改善するための活動であること，エリア移動が順調に進めば音楽棟の糞尿被害が根本的に解決されることを説明してもらい，掲示や活動に理解をいただいた。ただし，なるべく畑からは遠ざけていく形で，ふようロードの猫の移動も進めることとなった。きちんと活動趣旨を理解してくれて，担当学部につないでくれた学生支援課担当者の方にはありがたく思っている。

”山大にゃんこ大作戦”というポップな名前も相まって，団体が猫を集めている，お世話をしている，といった誤解をされることはよくある。今回のことについても，どのようにして猫が今これだけいるのか，私たちがどのような立ち位置で活動しているのか，といったことを知られていないために起こった誤解であると思われ，今回新たに一つの学部の一人にでも知ってもらえたことは大きな進歩であるし，困っていることを言ってもらったことで，畑から遠ざけるというより良い方法が見つかった。最初に誤解やすれ違いがあることは当たり前であるので，大変ではあるが，地道に知ってもらえるよう働きかけていくしかないと感じた。

（ポスター掲示）

掲示については，プロジェクトの紹介ポスター，”団体で管理しているので餌付けしないで”ポスター，また”生態調査のために不定期でカメラ撮影をしている”ポスターの 3 点を掲示した。体育館裏や音楽棟，畑近くの倉庫，エサの放置が散見されていた場所を中心に目につくように掲示した。”生態調査のために不定期でカメラ撮影をしている”ポスターについては，過剰なエサやりに対する抑止力をより持たせるために作成した。昨年度からトレイルカメラの利用を検討しており，今年度も必要に応じて利用しようと考えていた。まずはポスターを用いてそのことを発信することから始めた。結果として，今年度実際にカメラを稼働させることはなかったが，この掲示をすることは大きな効果があると考えられる。

活動を開始してからしばらくが経ち，一時期ふようロードでのエサの放置が散見された。それをしている人とコンタクトをとるのが難しかったため，活動終わりから翌日まで，エサの放置があったピンポイントの場所に掲示ポスターを設置した。数日それを繰り返すと，徐々にエサの放置は見られなくなった。現在も完全になくなったわけではないと思うが，積極的に掲示を利用していくことは有効だと考えられる。

他に，音楽棟向かいの教育学部棟入口にも掲示を行った。これは，ある活動日，体育館裏の猫たちがある人についていって校舎の中にまで入り込んでいくのを目撃したためである。教育学部玄関前の広間に体育館裏の猫がいることは以前からあった。しかし，校舎の中にまで猫が入り込んでしまうことが続くと，学習・研究環境として問題となる可能性がある。その人とコンタクトは取れなかったが，定期的にエサやりをしていて猫が懐いていると思われた。これを受けて，校舎入り口に掲示を行った。それ以降，校舎内まで入っていくことはほとんど見なくなったが，今後も校舎に入り込むことが続くようであれば，必要に応じて対応を検討するつもりだ。

さらに，音楽棟付近にも掲示を行った。これは，先述したエサやりさんだけでなく，エサがばらまかれている場面が散見され，中には人のお菓子などが放置されていることもあり，不衛生・不適切なエサやりが度々あった。これを受け，音楽棟工事現場入り口付近にもポスターを掲示した。

ポスター掲示：ふようロード

ポスター掲示：ふようロードでエサの放置があったポイントに一時的に

ポスター掲示：教育学部棟入口

ポスター掲示：音楽棟駐輪場

ポスター掲示：ふようロード出入口

ポスター掲示：その他置きエサがみられた南門付近

（立て看板，腕章）

積極的な活動周知の一環として，ポスターの他に立て看板や腕章を用いた。立て看板にはプロジェクトの紹介と餌付けしないように呼び掛けるポスターを貼り，活動の間に限り設置した。これまでは通りすがる人が不思議そうにちらっとこちらを見ることも多かった。私たちが何なのか，何をしているのか自体も分からない人がいたかと思われるため，立て看板の利用は，その人たちにとっても，また活動メンバーにとっても，安心を与えるのに有効な方法であったと思われる。また，これまでは学生支援課から山口大学のビブスを借用し公認の活動であることを示していた。これは大きな効果があったと感じており，今年度はさらに腕章を装着し，より分かりやすいようにした。

ポスターを貼りつけた立て看板

腕章

（猫の誘導）

実際の活動にあたっては，給餌場所を少しずつずらしていくことで猫の生息エリアの移動を試みた。まずは体育館に沿った方向に移動する計画で進めた。猫の集まりは日によってまちまちではあり，活動開始時の定位置はなかなか変化しづらかったが，だんだんとグラウンドに向かう途中の広間でくつろいでいる姿が見られるなど，少しずつ移動は進んでいるように思われた。しかし，工事の範囲が広がるとともに立ち入り制限がかかり，猫の定位置にも変化がみられたため，教育学部棟に沿う方向に誘導コースを変更した。給餌時間帯にふようロード側へ移動することには猫もだんだんと慣れてきているようで，少しずつふようロードに近づいていった。しばらくすると，体育館裏にすぐ戻らず，畑や陸上競技場，教育学部中庭あたりを探検している様子も見られた。

体育館裏の給餌場所スタート地点

給餌場所をグラウンド方向に移動していく

さらに移動

移動

コースを変えさらに移動（誘導している様子）

ふようロードに到着

グラウンドを散策する体育館裏の猫

ふようロードを散策する体育館裏の猫

ふようロードの給餌場所の移動

グラウンド側に移動した給餌場所で食べる
ふようロードの猫

（糞の様子）

エリア移動の状況は，糞の様子からも分かることがある。ふようロードに 3 頭の猫がいた昨年度から今年度はじめにかけては, グラウンド沿いの側溝に糞がよく見付けられていた。ふようロードの猫が 2 頭死亡してからは，以前はかなりの割合で見つかっていた側溝の糞が，ほとんど見えなくなった。一方で，体育館裏の猫たちは，基本的には体育館及び音楽棟付近にいることが多かったため，排泄もその近辺でしていたようだった。特に工事で地面が掘り起こされたところは，猫にとって好条件な排泄場所であるため，工事現場内で排泄している様子が高頻度で見受けられた。できる限り除去していたが，工事現場内ということもあり限りがあった。ただし，ふようロードでの給餌に慣れていくにつれ，食事後に少しふようロードに留まっていたり，ふようロード横の側溝でトイレをして帰っていったりする様子も見られた。その後，また側溝で糞が見られるようになったため，体育館裏の猫たちがそこで排泄していると考えられ，エリア移動が進んでいることが感じられた。時には畑で排泄してしまっている場面もあり，それについては可能な限り除去するように努めた。エリア移動のコース途中であり，排泄しやすい場所であるため，しないようにコントロールすることは難しく，エリア移動を続けるのであれば，一時的に仕方のないものとして，その都度除去する形で対応するしかないかと思われた。

掃除：体育館裏（工事前）

掃除：体育館裏（工事前）

掃除：ふようロード

掃除：体育館裏からふようロードに向かう途中

掃除：ふようロード

（団体外のエサやり）

順調にエリア移動が進んでいる時期もあったが，様々な課題があり，すんなりとはいかなかった。すでにエサやりさんとの折り合いがうまくいかなかったことを述べたが，音楽棟付近（工事現場内）での当団体以外のエサやりが続いていたため，定住位置の移動が難しかったり，また，お腹が空いておらずこちらの給餌に見向きをしなかったりといったことが目立ってきた。もちろん，距離的にも近く，時間も早めで，慣れている人からのエサやりが続けば，猫は定住場所を移動する理由がなくなる。さらに，3 月には放置されたエサに見知らぬ猫が寄ってきている様子（2.2 で後述する新たに侵入してきた黒白の猫）も見られ，エサの放置の影響の大きさを改めて認識することとなった。先述したように，エサやりをする人も分かってはいるのだろうが，長く可愛がって続けてきたエサやりを止めたりやり方を変えることはその人にとってはとても難しいことだ。その気持ちを汲んだうえで，歩み寄りを重ねていくしかない。これらのことについては，”キャンパス内の猫についての交流会”の時に話し合い, エサの放置はせずにふようロードに誘導する方向で協力していくことでお互いに理解を得ている。また，その他にも不定期でエサがばらまかれていたり，中には人のお菓子が放置されていたりと，不衛生かつ不適切なエサやりも見られた。

このようなことがあり，定住場所がなかなか動いていかないと，誘導する距離が長くなってくる。人通りが多いこともあり，猫も隠れたり止まったりしながら進んでくるような様子だった。その時の空腹状態にもよるのだろうが，途中で止まって動かなくなってしまうこともあった。

体育館裏のエサやり

体育館裏のエサやり（別の人によるもの）

ふようロードのエサやり

(縄張り争い)

また，体育館裏の猫たちがふようロードにいくにつれて，仲がうまくいかない猫どうしが出てきた。猫は基本的には単独行動をする動物であるが，エサ場などを中心に集団を形成することもある。(特に人のエサやりであれば，時間がそろったり，よそに探しにいかなくなったりして，より集団化しやすいと言えるだろう。）猫は縄張りをもつ動物であり，猫の社会では曖昧ながらも上下関係が存在する。気に食わないもの同士がどちらも降参せず譲らない場合，けんかに発展する場合がある。

ふようロードに 1 頭（※），体育館裏に 5 頭いて，けんかをしてしまう可能性として十分あると考えていた。大抵はそれほど気にしていないように見えた。むしろ，体育館裏の猫の中には，私たちの給餌時間以外でも，ふようロードの猫と仲良く一緒にいる姿が見られていた。しかし，体育館裏の 1 頭だけはふようロードの猫と反りあ合わなかったようだ。お互いに威嚇し合って攻撃態勢をとっている場面が何度かあった。それまで順調なペースでふようロードへの誘導を進めていたが，体育館組の誘導はペースダウンし，ふようロード組のグラウンド側への移動を先に進めることにした。

けんかへの対応としては，けんかに発展しそうな場合は間に入り仲介した。ただ，けんかによって上下関係に決着がつく場合もあると考えられるため，とりあえず猫たちで解決するのを待ち，怪我をするほどに発展した場合のみ仲介に入る，という方法が良かったのかもしれない。

（※）ふようロードでは昨年度から 3 頭の管理を行っていたが，そのうちの 2 頭は，10 月および 11 月にそれぞれ死亡したと思われる。年齢も５～６歳と野良猫としては高齢であり，徐々に衰弱していっている様子が見られていた。

ふようロードの猫に喧嘩を売りに行く体育館裏の猫

ふようロードの猫（右）と仲良くしている
体育館裏の猫（左）

（見知らぬ猫の接近（サバ白））

ふようロードエリアでの活動中に起きた出来事として，9 月中旬～下旬にふようロードに見知らぬ猫（耳カットはなく不妊未処置）が現れた。痩せており，団体で用意している飼料を狙っている様子がうかがえた。団体内で相談し，むやみに餌付けしてキャンパス内に住み着かせてしまうのは避けたい，という方針のもと，まずはその猫にはエサをあげないようにした。給餌中の見守りを強化し，飼料を狙ってくるようであれば，少し近づいて食べさせないようにした。すると，2 週間ほどでふようロードから姿が見えなくなり，その後もキャンパス内での目撃情報はない。

このことから，たとえキャンパス内に一時的に迷い込んだとしても，餌付けがされなければ住み着く可能性は低くなると考えられる。今回私たちは，むやみに餌付けをしないという方法をとったが，見知らぬ猫への対応というのは今後も議論が続くところであると思われる。やせ細った猫を放っておけないという気持ちは多くの人が抱くものであるし，あるいはエサの放置が続けば知らず知らずキャンパス内をエサ場と認識し住み着いてしまう。特に気持ちの部分については難しいところであるが，少なくとも将来誰かがその責任を取らなくていいように，みんなで一緒に話しあって自分たちなりの方法を選択していかなければならない。

交流会などを通してこの件についてもエサやりさんと少し話をした。当団体としては，猫に TNR をするしかない申し訳なさやつらさ，大変さを分かっているからこそ，新しく猫を住み着かせることはなるべく避けたい，という思いがあり，エサやりさん側もそれは理解をしてくれているようだ。一方で，お腹が空いてそうでかわいそう，自然に住み着いてしまった猫を邪険にするのはかわいそう，といった思いは簡単に無視できるものではない。

開けた出入口が複数個所あったり，山林が隣接していたりするため，猫が迷い込むことを完全にコントロールすることは不可能であり，またそれぞれ状況が異なる。そのため，一元的な対応策の確立というのは難しく，その都度対応を検討していくしかないと考えられる。ただし，少なくともむやみに餌付けをしないこと，エサの放置をしないことといった最低限の共通認識は必要であると思われ，今後交流会などを通して検討を継続していきたい。

ふようロードに現れたサバ白猫

（最近の様子）

3 月下旬に入り工事が撤退すると，猫はもとの体育館裏の位置に戻っていった。さらに，地面へのエサの放置も再開されており，それについては改めて掲示や呼びかけが必要である。誘導がまた一からやり直しになった感じはあるが，それでも，なかにはふようロード側によく姿を見せるようになった猫もおり，まったくの骨折り損というわけではなさそうだ。工事により音楽棟ではコンクリートの部分が増え，猫の排泄場所が以前よりは限定されたことで，糞尿被害の軽減は望まれるかもしれない。それでも，排泄場所や人通りの少なさ，隠れやすさなどの点で猫が生息しやすい場所ではある。つい先日には，キャンパス内清掃の関係者から，掃除中の糞尿について相談があり，音楽棟エリアもその一例としてあるそうだ。清掃中はしゃがんで地面に顔や体が近づくため，糞尿があまりに過剰であると，臭いだけでなくその粉塵による被害があったり，外にいる動物の糞ということで病気の心配もあるとのことだった。また，エサやりさんと管轄学部との間で合意のもと冬場の猫シェルター設置が行われていたことが分かるなど，猫についての情報や管理がまとまっていない状況だ。

ふようロードの 1 頭については，グラウンド側への給餌場所の移動は順調に進んでいった。しかし，やはり畑側の方が身を隠しやすいため，ふようロード側に常にいるようにすることは難しいようだ。また，一度体育館裏の猫と対立した後から，そちらが気になるようで，体育館裏の猫たちようの飼料を気にする様子がうかがえた。そのような中で，もともと警戒心が強いことも相まって，グラウンド側の給餌場所にたどりつかないことも増えてきた。今は，少し場所を戻し，猫の様子を見ながら給餌場所を設定している。

今年度トライしてみて分かったように，エリアの移動と統合は容易ではなく，長い時間がかかるものと思われる。今後体育館裏の猫たちの管理については，エリア移動を引き続きトライするか，逆に生息場所を留めて排泄場所を整備することで糞尿被害の軽減に取り組むかなど，どのように管理していくか検討が必要である。施設関係者，清掃関係者，エサやりさんを含め，関係者どうしで話し合っていく必要がある。

また，昨年度からの継続課題として，毎日の活動を続けるにあたっての人手不足の問題がある。活動時間帯に幅を持たせたり，少人数で対応したり，というように対応をせざるを得ない状況が続いてしまうため，今後も人員確保には力を入れたいところである。

結果として，今年度での生息エリアの移動・統合は達成できなかった。しかし，管理エリアを広げ，エリア移動にもトライしてみたことで，分かったことや関わる人が大きく広がったことは確かである。

ふようロード側に姿を見せるようになった
体育館裏の猫

工事終了後，体育館裏に戻っている猫たち

工事終了後，再開されたエサの放置

２．２新たにキャンパス内に現れた猫たち：TNR と譲渡

ふようロードに現れ 2 週間ほどで見なくなった猫の他に，今年度もキャンパス内への新規野良猫の侵入が何度かあった。5 月ごろに黒い若猫，6 月ごろに黒白の若猫～成猫，そして同じく 6 月に子猫を確認した。

まず子猫については，6 月に経済学部に突如現れた。学生伝いで団体に情報が入り，活動終わりに経済学部を訪れ様子を確認するようにした。経済学部校舎横の室外機あたりに段ボールが置かれており，そこで生活しているようだった。段ボールの持ち主は不明であるが，周りの学部の学生が心配してエサをあげるなどしていたようだ。一度，その学生たちと会うことができ，団体の活動について知ってもらったり，「かわいそうなのは分かるが今後どうするかも考えたうえで責任ある行動をとらなければいけないと思う」ということを話しあった。しかし 1 か月しないうちに，子猫の姿は見えなくなり，その後の消息は不明となった。目撃情報などを踏まえると保護された可能性を考えてはいるが，失踪や死亡の可能性も考えられる。

経済学部室外機の間にあったダンボール

経済学部に現れた子猫（最初は食堂あたりで目撃）

5 月～6 月に現れた黒猫と黒白の若猫は，いずれも国際交流会館～経済学部棟に現れた。しばらく様子を見ていたが，いずれも定期的に目撃情報が続き，特に黒猫のほうは国際交流会館で見かける頻度が高く，ほとんど住み着いている状態と思われた。8 月下旬には 2 頭が一緒にいるところも目撃し，早めに対応しないと子猫が生まれる可能性があった。黒猫は観察によりメスと思われたため，さらに緊急性は高いと思われ，新たに子猫が増えてしまわないことを第一優先にしたいという方針のもと，できるだけ早めの TNR を実施することを決定した。12 月中旬に捕獲・避妊手術を行い，リターン予定であったが，団体メンバー関係者から引き取りの依頼があり，結果として譲渡する形となった。猫がまだ幼いこともあり比較的人慣れしており，ノミ・ダニが一見見当たらず，健康状態も良好であると思われた。これらのことを考慮し，譲渡適正ありと判断したため，イレギュラーではあるが譲渡することとなった。実際には，学生では住居の関係上一時保護などが基本的にできず，さらに外部に譲渡するとなると，人馴れや初期医療，譲渡先への事前説明や誓約書の用意等，気を付けるべき点が多く，団体のみによる譲渡活動にはハードルがあると思われる。

経済学部駐車場に現れた黒白猫

国際交流会館に現れた黒猫

国際交流会館で一緒にいた黒白猫（右）と黒猫（左）

TNR 活動の様子：捕獲器の設置

譲渡後の黒猫

黒白の猫は国際交流会館～経済学部棟での目撃頻度にはばらつきがあったが，2 月～3 月にかけて，ふようロード～音楽棟エリアに姿を見せた。音楽棟付近に放置されているエサに寄ってきている様子がうかがえた。

さらに，その後に得た情報では，理学部 3 号館あたりにも姿を見せているようで，行動範囲が広いことが分かる。国際交流会館あたりを離れるようになったのは，そこでのエサの放置がなくなってきたためとも考えられ，2.3 で後述する，国際交流会館あたりでの呼びかけによる効果が表れたのかもしれない。しかし，キャンパス内にいることに馴れる十分な時間は経っており，隠れる場所が多く，エサ場が他にも多くあるため，キャンパス内を探りはじめたのではないかと思われる。

音楽棟あたりに姿を見せた黒白猫

昨年度を含め，これまでも見知らぬ猫がキャンパス内に姿を見せ，新たに住み着く例は散見されていた。昨年度も新たに住み着いた猫 2 頭に対し TNR を行った。（その 2 頭については，リターン後 1 か月後には姿が見えなくなっており，タイミングや姿の消し方から，誰かが引き取った可能性が高いと考えている。あるいはキャンパス外に生息場所を変えた可能性ももちろんある。）キャンパス内に新たに野良猫が迷い込む例を見ていると，国際交流会館横の出入口からの侵入が多い。理由としては，国際交流会館～経済学部棟駐車場～人文学部玄関にかけて，出入口がすぐ横にあるところで過剰なエサやりやエサの放置が多いためだと考えられる。もともと，TNR 済みの 2 頭が住み着いているが，他のエリアと比べて 2 頭という数は少なく不妊処置が済んでいるため，縄張りによる侵入抑制力が弱いことも一因かもしれない。国際交流会館は留学生の住居であり，施設関係者から猫が住居に侵入しているとの相談も受けたことから，より注意が必要である。

後述する国際交流会館付近での呼びかけの他に，外部野良猫侵入への対策として，猫除け用の忌避剤を利用した。昨年度は猫除け超音波装置を利用したが，費用的な面と効果の比較のために，今回は忌避剤を選択した。
まずは，現時点で最も侵入経路として多いと予想される，国際交流会館横の出入口に散布した。ペッパーオイルとメントールが配合され，猫が臭いや刺激を嫌がって寄ってくるのを避けるというものであり，1 回の散布で 2～4 週間ほど効果が持続するものだ。散布時にはやや刺激臭がするものの，1 時間もすれば通り過ぎる分には臭いなどは気にならない程度に落ち着き，人への影響はそれほど強くないと思われる。問い合わせなどがあれば，散布エリアや頻度の調整を行っていく。今後，ふようロード出入口を始め他の散布エリアも検討していく。ちなみに，昨年度に設置をした猫除け超音波装置”番人くん”も，引き続き稼働中である。

猫除けの方法として，他にローズマリーやミントなどのハーブを植えたり，酢やハーブを用いた自作忌避剤をまいたりといった方法がある。2.1 でキャンパス内の大学関係者から話があった糞尿被害に関連して，花壇が排泄場所になってしまっていることも気にかかっているようだった。まずは，ハーブや忌避剤を利用してみることを提案してみたが，こういった問題は，本来はエサやりをしている人が考慮しなければいけない問題であるし，関係者みんなで話し合うべき問題である。今後，交流会を行っていくうえで一つの重要な観点である。

国際交流会館のエサやり

経済学部駐車場のエサやり

国際交流会館横のキャンパス出入口に忌避剤を散布

以上，今年度は外部野良猫の侵入は，把握してある限りで 4 頭であった。ふようロードの 2 頭が死亡してしまい，その他，死亡情報や失踪情報を合わせ，キャンパス内猫の頭数推移は以下のグラフのとおりである。なお，黒白猫については，目撃情報や生息エリアがいまだ不安定ではあるため，頭数には入れていない。また，キャンパス内のコロニー分布は以下の図のようになっている。

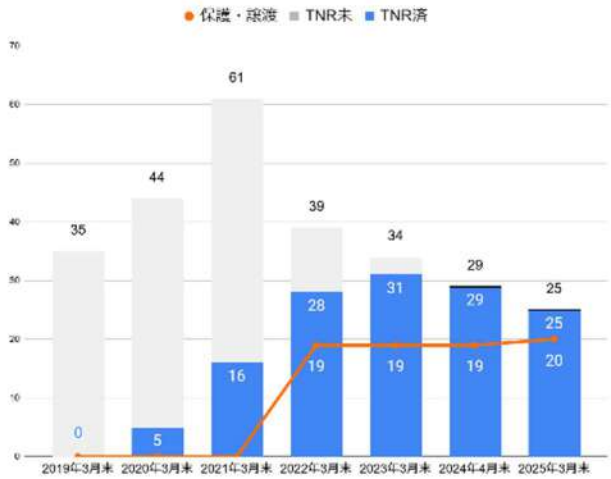


図 1　キャンパス内の猫の頭数推移

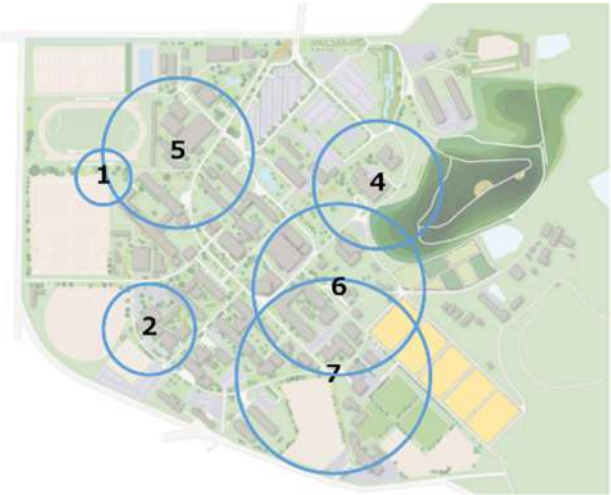


図 2　キャンパス内の猫の分布

２．３より多くの人に伝える：留学生への呼びかけ

国際交流会館～経済学部棟駐車場～人文学部玄関にかけて，出入口がすぐ横にあるところで過剰なエサやりやエサの放置が多いと述べたが，その中には留学生によるエサやりも一部あるようで，昨年度から気にかかっていた点である。特に留学生会館は住居として機能しており，猫の侵入に関して実際に相談も寄せられた。また，外部の野良猫の侵入が多いところでエサの放置などが続いてしまうと，新しい野良猫の住み着きが過剰になってしまう。実際に，今年度侵入した猫のうちの２頭も，国際交流会館横の出入口から侵入したと思われ，国際交流会館裏でエサやりが行われており，そこへの住み着きが進んでしまっていた。

団体による給餌管理を始めてから，不必要・不適切なエサやりを制御するためのポスターを各所に掲示していた。しかし，日本語であるため留学生に対しては伝わりづらいところもある。当大学は留学生が多いため，彼らへの呼びかけも必要である。そこで，留学生係に相談したうえ，英語版のポスターの作成に取りかかった。また，ポスターと同様の内容のメッセージを，やさしい日本語と英語でメールを使って周知することにした。

留学生に対してこの問題を考えるときに難しいポイントとしては，動物や野良猫への考え方について，地域性や民族性が少なからず関係していることである。野良猫に対する考え方にはある程度の地域性や民族性が関係している。猫に限らず，ある動物がある地域では神聖な動物として扱われていたり，あるいは別の地域では使役動物として扱われていたりと，動物に対する考え方は国や地域によっても大きく差がある。(もちろん，時代や社会の変化によってそれは異なっていき，また特に現代では，同じ社会でも個人の価値観の違いがより浮かびあがりやすいところもあるだろう。) 日本人どうしでも，今実際に起きているように，価値観の違いによる衝突があるが，国が違えばさらに大きな違いが見えてくることもある。それでも，多くの留学生が通う本大学において，多くの人がキャンパスを利用し，人によってはキャンパス内で生活する環境においては，留学生も交えて猫への関わりについて考えていかなければいけない。それぞれが異なる背景や価値観を持っていることは理解をしたうえで，動物を慈しむ気持ちを否定するものではなく（この点については留学生に限らずではあるが)，自分やまわりにも困ったことが起きることを説明し，エサをあげないようお願いする内容とした。

作成にあたっては，団体内の国際総合学部のメンバーを中心に英語の添削などに取り組み，おもプロ担当者や留学生係にもご協力いただきながら内容や文章を考えていった。ただでさえ一言で説明することはできない内容であるが，さらに留学生に向けてということで，何に焦点を置くべきか，またシンプルかつやさしい表現でまとめることが非常に難しかった。1 か月近くかかって完成し，11 月中旬にポスター掲示とメールでの呼びかけを行った。昨年度からの課題であった英語版のポスター作成が達成できたことは良かった。また今回，留学生向けのポスターとメッセージの作成を通して，国際総合科学部のメンバーが大きな力となり，団体内の学部層が広いことは大きな利点の一つであると感じた。他にも，学生伝いで各学部の施設近くにいる猫の情報が入ってくることも多く，情報網を広く敷くことができるという点でも大きな利点であり，今後もいろんな学部の学生が参加してくれると嬉しい。

今後も必要に応じて随時メール周知を行うことが望ましいと思われる。また，留学生受け入れ時のオリエンテーション等で，猫のことについて事前に伝える機会が得られれば，より周知につながるだろう。

英語版のポスター

ポスター設置の様子

２．４子どもたちに知ってもらう：”ヤマミィ学級”

山口大学学童保育”ヤマミィ学級”で子どもたちと触れ合う機会をいただいた。キャンパス内の猫たちの写真を用意して自由にお絵描きをしてもらったり，猫の写真を利用したパズルゲームを一緒にしたり，動物クイズを企画したりした。また，レクリエーションを通して，子どもたちにも猫（野良猫）との関わり方について考えてもらうきっかけになるような何かを伝えたいという思いがあった。動物クイズの中に猫に関するクイズを混ぜ，キャンパス内の猫のことや野良猫との関わり方について考えてもらうことにした。

準備にあたり，どこまでを，どのように伝えれば分かりやすいかという点で工夫が必要であり，留学生に向けたものとはまた違った難しさがあった。家にいる猫とは違う”野良猫”というものがいることから始まり，そういう猫を見かけたらどう思うか自由に考えてもらった。”かわいい”，”どこから来たの”，”近くで見たことある”といった声があったり，中には”誰かがエサあげてるんでしょ”という声もあがったり，色々な意見が出た。動物に親しみをもってもらうことは大切であるが，好奇心旺盛な子どもたちが，不用意に近づくことを誘発してしまうと，怪我をしてしまったり，そこから病原体が移ってしまったりすることもあり得る。そこで，「野良猫を見かけても，無理に近づかないこと，触らないこと，何もあげないこと」というメッセージを伝えた。

ヤマミィ学級を通して，まずは子どもたちが用意したレクリエーションも楽しんでくれたようで，それが何よりも良かったと思う。猫の写真を気に入ってくれて，団体で呼んでいる名前をたくさん聞いてくれた。動物への親しみをもってもらうことと，一方で適切な関わり方を考えなくてはいけないこと，そのバランスをうまく伝えることが，今回だけでは十分でなかったかもしれない。それでも，野良猫という存在を知ってもらう機会をいただけたことはありがたかった。また，子どもたちが大きくなったときに，思い出してくれたり，考えてくれたりしたら，とても嬉しいことだと思う。

今回の企画にあたりご協力いただいた，学童保育の職員の方やおもプロ担当者の方にお礼を申し上げたい。

猫のお絵描き

猫の写真を使ったパズルゲーム

動物クイズ

野良猫についてメッセージ

好きな猫の写真をプレゼント

２．５Giving Campaign 2024 秋：おもプロのおかげでアカデミックスタッフ賞を受賞

昨年度に引き続き，学生による寄付イベントである Giving Campaign に参加した。活動を知っていただく機会として参加させていただき,今年度も多くの温かい応援コメントをいただいたことで,感謝の思いが大きくなり，また活動への励みとなった。さらにありがたいことに，大学教職員からの応援が多かった団体に贈られる賞である，アカデミックスタッフ賞をいただいた。おもプロの活動を通して，山大にゃんこ大作戦を知ってくださり，協力してくださったり，応援してくださる大学関係者の方々とたくさん出会うことができたので，今回このような賞をいただけたことは，おもプロで活動させていただいたからだと思う。賞をいただいたことというより，活動を続けてきたことで，多くの人が知ってくださり，関わってくださったことに気づけたことが嬉しかった。山大にゃんこ大作戦を応援してくださっている皆様に改めて感謝したい。

投稿写真

２．６地域猫活動ガイドブックをリニューアル：活動奮闘記

2019 年度に山大にゃんこ大作戦地域猫活動ガイドブックを発行していた。これは，山大にゃんこ大作戦発足当時，野良猫活動についての多角的・客観的な知識を得ること，また啓発の一環として全 5 回の講演会を開催し，それらの内容をまとめたものである。今年度，改めて講演会を実施し，ガイドブックのリニューアルなどを考えていたが，講演をお願いしたいと考えていた方と都合が合わず，見送りとなった。そこで，私たちの活動発足から今までの活動をまとめた”活動奮闘記”を付け加えたリニューアル版を作成した。今後も，内容の追記・修正などを加えながら，継続的にリニューアルしていきたい。団体外への発信はもちろん，人の入れ替わりが続く団体内での活動共有にも活用できる。団体内で活動記録を随時つけてはいるが，こうして外部にも発信できるような形に残るものとして作成できたのは良かった。原稿修正から印刷にかけて，ぎりぎりまで対応してくださった担当者の方，印刷会社の方，本当にありがとうございました。

色味もリニューアルしたガイドブック第２版

ガイドブック第２版

活動奮闘記１

活動奮闘記２

活動奮闘記３

活動奮闘記４

２．７他大学学生サークルとの交流

ある大学で猫についての活動を行っている学生サークルの方々が見学にやってきた。実際に毎日やっている活動を見学してもらいながら，お互いの活動について意見交換を行った。

その大学では，学生サークルのほか，教職員が中心となって活動している団体があるそうだ。2〜3 年前には 30 頭ほどいたのが，ここ 2 年ほどで 5 頭にまで減ったそうだ。これは，子猫の割合が多くほとんどが学内関係者を中心に譲渡されてきたことによる。譲渡にはやはり，教職員団体やサークル顧問など，一時保護のための住宅などをもつ学生以外の協力が大きいようだ。ただし，教職員団体と学生サークルは独立した組織で，連携がうまくいかないといった課題はあるそうだ。当キャンパス内はというと，2021 年度に主に子猫 14 頭の譲渡を行ったが，それでもなお 30 頭以上の成猫が生息していたため，もともとの生息数がかなり多いことが分かる。キャンパスが山奥に立地していることから，今でも毎年数頭のペースで子猫の侵入があるそうで，譲渡を中心に対応しているとのこと。また，今キャンパス内に生息している成猫 5 頭については，サークルで給餌を行ったり，必要であれば最低限の投薬をしたりするなどの管理をしているそうだ。サークル内外でエサやりは行われており，私たちと同じように，他のエサやりさんとのコンタクトや連携には苦戦しているとのこと。

本キャンパスでは，投薬をしたり動物病院に連れて行ったりしているエサやりさんもいる。2.1 において，エサやりさんから動物病院への健康状態の相談や投薬などについての問い合わせもあったと述べたが，当団体では現状，投薬などのケアは行っていない。キャンパス内にまだ 30 頭弱の猫がいるなかで，費用や人手の面での負担が大きく継続性を担保できない。

医療的ケアについてもみんなで話し合っていくべきポイントだと思う。そもそもどれくらいのケアを行うべきか・行えるかは，人それぞれ事情や価値観が異なるが，TNR が収束している現状では，個人の判断によるという側面も強いかもしれない。しかし，資金・労力的にパンクするまで手が引けなくなってしまうケースも実際にあり，特に私たちは人の入れ替わりも多くなってしまうので，足並みをそろえて進めていくことにも注意が必要である。さらに，手厚いケアが逆に猫に苦を強いることになるのではないかという論点もあるだろう。外にいる以上，体調不良や病気を繰り返すことは避けられない。例えば，すぐに手を出してまた体調不良を繰り返すことの苦痛もあるのではないか，そのまま引き取ったり譲渡したりするあてもなく長く入院させた後でまた外に返すことが適切なのかどうか，といった意見もある。また，十分な診察なしの処方や，指示がないまま投薬/塗薬することは，症状の改善に逆効果をもたらす可能性も十分にあるだろう。助けたいという気持ちは純粋なものであるが，相手が猫である以上，どのような行為もあくまで人間としての主観であり，二面性があることは意識しておくべきだと考える。難しいところではあるが，そういったことについても話し合っていくことが望ましい。

今回，他大学での野良猫の様子を聞いて，地域によって野良猫の状況や変化の仕方，また自治体による不妊手術助成制度や活動の仕方などが異なることを改めて学んだ。特に，教職員による自主団体があるのは驚きであった。それぞれの選択や進め方にメリット・デメリットがあるだろうし，自分たちが抱える状況や課題のなかで，大事にしたいこと，優先したいことも異なることが普通である。重要なのは，そのコミュニティの中で一緒に考え取り組んでいくことだと思った。他大学や他団体との交流は勉強になるし，自分たちの状況を客観視できる機会でもある。来年度開催予定の複数大学の交流会の話もいただき，今後も機会があれば勉強会や交流会に参加していきたい。

２．８キャンパス内の猫についての交流会を開催

すでに前項までにも触れていたが，”キャンパス内の猫についての交流会”を開催した。昨年度から構想はあり，優先課題ではあることは分かっていたものの，開催することへの不安やエネルギーも大きく，年度末に何とか開催することができた。キャンパス内の猫に関心を持っている人たちどうしで気軽に話ができるような会として企画し，エサやりさんや大学関係者等，これまでに当団体に関わってくれたことがある方々を中心に声をかけた。結果として第 1 回である今回は，想定よりも少人数とはなってしまったものの，開催できたこと自体が大きな進歩であると思われ，話し合いを通して得た収穫も大きかった。

本キャンパスでの野良猫が一時期 60 頭以上にまで増えてしまったのは，過剰なエサやりの他に，大学の環境問題にあたる特定の管理部署がなく，責任所在も誰も分からないため，知らず知らずのうちに問題が大きくなっていってしまったことも原因の一つであると考えられる。加えて，管轄学部やその時の担当者によって方針や対応が異なるため，一部のエサやりさんと施設関係者の間で対立が起きたり，あるいは大学への猫の相談に対して山大にゃんこ大作戦に管理所在が向かったりなど，猫についての情報，立場，考え，活動が様々であり，3 者以上がそれらを共有する場がこれまでなかったために，状況が複雑化してきた背景がある。

野良猫問題は地域の環境問題であるため，みんなで取り組んでいくことが友好的手段であり近道である。エサ

やりの問題が顕在化してきたとき，一方が他方に対して TNR の実施やエサやりの禁止・方法変更を要求するだけでは，たとえ筋が通っていても，衝突が起きてしまい状況がさらに複雑化してしまう可能性も高い。よって，お互いに気持ちを尊重し歩み寄りの姿勢で，一緒に考えていくことが必要である。例えば，エサやりに困っている側は，「猫を大切に思う気持ちは理解できる。自分も協力するから一緒にやり方を考えていかないか。」という姿勢で，エサやりをしている側は，「不快に思う人がいることも理解している。頭数のコントロールや衛生的な配慮もしたうえで行うから，一緒に考えてくれないか。」といった感じである。それでも最初からお互いがそこまで意識して冷静に向かい合うことは困難なことも多く，バランサーの役割が必要であると考える。山大にゃんこ大作戦はその活動経緯や団体方針から，バランサーとしての側面も持つと考えている。

交流会はキャンパス内の猫についての友好的かつ効果的な管理方法を見つけていくために，大きな役割をもつと考えている。実際に話をしてみると，お互いに認識の違いや共有できる情報が多くあり，また，こうありたいとか，こうなってほしいとか，素直な気持ちも聞くことができたことは，それがどういう内容であれ，とても嬉しく思った。考え方や立場に違いはあれど，お互いに歩み寄る姿勢で話し合いができ，当初の予定より少人数とはなってしまったが，十分に有意義な会であった。終わってみれば，もう少し早くすべきだった，という思いは正直あるが，この 1 年を通して，いろんな活動をしたり，いろんな意見を受けたことで，それによって自分自身が得た新たな考え方もあり，それらがあったからこそ，ここまで向き合って話し合うことができたと考えている。今後も定期的な開催を考えており，関係者をはじめ色々な人と話をしていきたい。

３．総括

”野良猫ゼロ”という見る人によっては冷酷なタイトルで始まったこのプロジェクトではあるが，そのタイトルの真意について考えることが多い 1 年であった。”野良猫ゼロ”というプロジェクト名は，分かりやすさを重視したところが大きく，決して猫を排除しようという意味ではない。むしろ，望まれない死を迎える猫を減らしたいという思いは，団体発足以来一つの柱であり，そのために実施を決断した TNR だったし，譲渡も多く行ってきた。ただ，TNR がここまで進みこのまま外部からの野良猫を含め管理を続けていければ，野良猫は確実に少なくなっていく。その中で，今年度は活動の幅も広がり，ありがたいことに人の輪も広がっていった。同時に，様々な意見を受ける機会も多く，自分たちの言ってきたこと，やってきたこと，目指していることが正しいのかどうか不安が押し寄せてきた。

すなわち，本当に”野良猫ゼロ”の環境を目指すのか，そもそもそれは善なのか。人のエゴで増えてしまった猫を今度は人のエゴで減らしていくことに疑問はないか。そして，これまでの動物に関する歴史をみて，猫がいなくなったらまた増やすような活動が起きる未来がないと言えるか。

大昔にヤマネコが家畜化されてイエネコ（いわゆる飼い猫）となり，日本では，平安時代から江戸時代までの 800 年程は高価な貴重品として繋いで飼われていたが，江戸から明治までの 300 年程は放し飼いが続き，鼠から人の大切な物や命まで守る”益獣”として扱われていた。放し飼いと屋外での繁殖を良しとしてきた 300 年の間に，野良猫というものが生まれた。一方で殺鼠剤の開発がされたり，猫のいない地域に鼠害対策で大量に子猫を運び込んだ結果，新たにノネコ問題（イエネコが野生化）が生じたりなど，”益獣”だった野良猫は大正からの約 100 年で”厄介者”となった。その後の 70 年間は殺処分ばかりの対応が続き，1990 年代ごろからようやく TNR 活動が広まっていき，次いで地域猫活動という概念が生まれた。動物についての問題は，いつも人の思惑や生活の変化に動物たちが振り回された結果であり，野良猫の問題も同様である。

野良猫を減らしていくことが善であるのか，野良猫という存在に対しもっと寛容な社会であっていいのではないか，という問いもある一方で，”人のエゴで増えてしまった猫”と言っているように，野良猫についての住民トラブルが問題となり TNR や地域猫活動の概念が生まれたのは，その数が増えすぎてしまったことが要因であることも事実である。それは本キャンパスも同様である。なぜなら，野良猫の数が一定に少なく，それほど困っている人がいないなら，そもそも話題にならないからだ。動物愛護への関心の高まりに付随する形で，野良猫への関心が過剰なエサやりという形で高まっていったり，あるいは独居老人によるエサやりも増えたりしたことで，野良猫の増えすぎとそれに伴うトラブルの増加が起きる地域が増えていった。さらに，そういった野良猫トラブルにおいては，感情的な議論になってしまうと，両者ともに思考や意見がさらに極端になり，かたや過剰なエサやり，かたや過剰な嫌悪という構図ができてしまい，お互いの意見を聞く耳をもたなくなってしまうという難しさもあるだろう。

本キャンパスでも，猫の頭数が異常に増えてしまったことにより，人にとっても猫にとっても悪循環が続いていたという経緯がある。繰り返しになるが，適切な頭数管理ができ，衛生管理ができ，困る人がいないのであれば，それはそれで良いのだと思う。しかし，人の出入りが多い広大なキャンパス内において，適切な頭数で維持

することを前提とした管理は簡単ではないと考える。継続的な頭数や個体把握にもかなりの労力がかかり，一元的な給餌管理をするにしてもしないにしても，その活動維持は大変である。生きた動物を相手にし，状況は常に流動的であるため，例えば TNR の判断や給餌のコントロールなどに対し，一定の基準やシステムを設けることが難しく，実際に給餌管理や TNR などを行うとなれば，大きな費用を必要とする。適切なコントロールを維持することには，知識や経験，客観性や中立性が求められ，誰が/どこがそのバランスを保ち続けるのか，という問題がある。学生サークルがそれをし続けられるとは正直考えられず，また，入れ替わりのある大学部署が担当するのも不安定要素が大きい。獣医学部が中心となり，TNR なども含めた野良猫の管理を実践的学習の一環として取り組むという手もあるかもしれないが，生体を用いた実習自体への規制が強くなっている昨今，例えば，学内の野良猫を実習に利用するということに倫理的な議論が生じることは想像でき，野良猫がいる前提でのシステム構築は困難だと思われる。そうであれば，むしろ獣医学部に限定するよりも他学部を含めた多くの学生が関わるほうが利点も大きく，その点で言えば現在のようなサークル/おもプロ団体としてのほうが良いのかもしれない。

以上のことを考えると，個人的には大学キャンパス内という環境は一定数の猫がいる状況を適切に維持していくのにはことさら大変な場所に感じられ，野良猫ゼロを目指し，その後も新たな野良猫を住み着かせないよう餌付けのコントロールをしていくという方針が，現段階では最も考え得る見解である。”山大にゃんこ大作戦フェーズ 2”の名の通り，TNR が一通り完了している今，本キャンパスの猫管理は次の段階に入っている。実際問題としては迷い込んだ猫への対応をどうするかという話などになってくるのだろうが，もちろん先ほど述べたことは現段階での個人的かつ団体として働きかける場合を考えたうえでの見解であり，正しいのか正しくないのかは正直分からない。

私たちの活動は，ある人から見れば野良猫を排除しようとするような冷たいものに見られることもあるし，またある人から見れば無責任なエサやりと見られることもある。間をとりなすバランサー的な立ち位置である以上，板挟みになることも多く，団体としての存続や新たな野良猫への対応，エサやりさんとのバランスのとり方など，答えの分からない問題に頭を悩ませることも多い。ある日，近くにいる猫や私たちの活動を興味深そうに見ている学生数名がいた。普段，通り過ぎる人一人一人に声をかけることはハードルが高いが，少し勇気を出して声をかけてみた。サークルで管理しているからエサをあげないでほしいという旨も伝えたところ，すっと受け入れてくれた。これまで活動していて色んな意見を受けるなかで，つい無意識に構えてしまう癖がついてしまっていたように思う。素直に話を受け入れてくれる人も案外多いのかもしれない，と少しはっとしたところがあった。無意識に構えて防御態勢をとってしまうのは相手にも伝わってしまうし，自分自身もつらくなってしまう。私たち自身も，一関係者として，もっと素直な気持ちで話をしたり話を聞いたり，という心持で活動していけたら良いのかもしれないと感じた。

TNR などを介して野良猫を管理していくという概念が生まれてからまだ 25 年ほどである。迷いなく言える正解というものはなくて，自分も含めいろんな人の中で絶えずゆらいでいくものだし，それぞれの人のゆらぎがぴったりと重なることはめずらしい。これまでの活動を振り返って，今考えれば活動の順序に矛盾が生じているところも多くあるし，その時に適切な表現だと感じていたものが全く違う言葉のように感じることも常々だ。その不安定な中で，時にお互いの意見や想いがぶつかってしまうこともあるだろうが，それは起きて当たり前であるし，それがないと見えてこない気持ちや着地点もあるだろう。関係者をはじめみんなで考えていく姿勢を大事にしていきたい。

４．今後の展開

他のエリアの管理に手を伸ばしたいところではあるが，まずは，今の管理エリアを維持していくことを優先したい。過剰かつ不衛生なエサやりが見られるエリアもあるため，それらのエリアについては，一気に給餌管理を始めるのではなく，ポスター掲示などできる範囲で行っていく。外部からの野良猫侵入についても引き続き観察を続けていく。

新年度に向けて新入生の勧誘に力をいれるとともに，後続メンバーが無理なく活動を継続できるような体制づくり・引継ぎにも力を入れ，団体内の交流も大切にしていきたい。

そして，交流会は定期開催を予定しており，団体活動としての定着・継続と参加者層の増加を目指す。

５．謝辞

本年度も，各学部への相談に力を貸していただいたり，ポスター掲示にもご協力してくださったり，ガイドブックの作成にぎりぎりまでご対応いただいたりと，あげるときりがありませんが，たくさんのサポートをしていただいた大学関係者の方々，関わってくださった皆様，本当にありがとうございました。私たちと一緒に，私たち以上にこの活動のことを考えてくださり，いつも快く相談にのってくださる方々の存在は，とても力になっています。まだまだ始まったばかりで，これからも何かとお世話になるかと思いますが，一緒に考えていければ嬉しく思います。

未来の農業プロジェクト

ーひこぼしプロジェクトー

代表者　　安岡直輝（経済Ｂ３年）
構成員　　鶴丸智也（経済Ｂ３年）花岡稜太（経済Ｂ３年）津田蒼太（経済Ｂ３年）
岸田獅道（共獣Ｂ１年）宮本桂太郎（共獣Ｂ１年）
荒木萌那（農学Ｂ１年）柘植美里（農学Ｂ２年）
今村花奈子（創成Ｍ１年）村上智哉（工学Ｂ３年）

１．はじめに

本プロジェクトの目的は，農業に関わったことのない素人でもスマート農業によって簡単に農業を行えることを証明し，農業の魅力を発信することで未来の農業人口増加を図ることです。近年，農林水産省のデータ[1)]によれば，自営農業に従事する“基幹的農業従事者”の人口は，2000 年には約 240 万人でしたが，2023 年には約 116 万人と半減していました。また，若者の農業離れが進むことで高齢化も急速に進行しています。このような背景を踏まえ，本プロジェクトでは農業の DX 化について農業体験教室を通じて発信し，農業の新たな魅力を伝える活動を行っています。

また将来就職する職種を決めている高校生の割合は 36.5%であるのに対し，小中学生では 25%[2)]にとどまっています。このデータから，本プロジェクトでは小中学生を対象に教室を開き，農業をキャリアプランの一つとして考える契機を提供しています。この活動をきっかけに DX 化について学び，農業への興味を持つきっかけとなることを期待しています。

２．活動内容

２．１スマート農業の実践

（ア）自動水やり装置

自作のプログラムを導入したラズベリーパイを用いて自動水やり装置を作成しました。※1

湿度センサーで計測したデータを基にホースから自動で水を供給し，小松菜の効率的な栽培を実現しました。また，カメラを使ったリアルタイム中継により，いつでも小松菜の成長過程を観察できる環境を整えました。※2

秋ごろに自動水やり装置を活用して栽培した小松菜を無事に収穫しました。収穫した小松菜は品質も良好で，プロジェクトの成果を実感することができました。

※1　自動水やり装置

※2　WEB カメラ

（イ）マコモの栽培，収穫，ドローンによる観察

防府市台道の「ともファーム」という農地を借りてマコモの栽培を行い，秋に収穫した後，天日干しを実施しました。また，ドローンを用いて成長過程を観察し，その映像を農業体験会で披露しました。この取り組みにより，効率的な農作業の実現と地域の農業に関心を持ってもらう機会を創出しました。

※3　収穫の様子

※ 4　ドローンで撮影したマコモ畑

２．２小中学生を対象とした農業体験会の実施

長門市しごとセンターの一室を借り，小中学生を対象とした農業体験教室を開催しました。プログラムでは活動内容やスマート農業の説明を行い，自動水やり装置のデモンストレーションや「アルゴロジック 2」アプリを使ったプログラミング体験，さらにドローンの操作体験を実施しました。参加後のアンケートにおいて農業への興味を問う項目で平均 4.25/5 という高評価を得ることができました。

※5　ドローンの操作方法をレクチャー

※6　子どもたちとの集合写真

２．３ボランティア活動

マルシェの会場設営のお手伝いと，ゴミ拾いのボランティアに参加させていただきました。

マルシェの会場設営のお手伝いでは，「KANO&KANO マルシェ」の開催のために，周南市大潮小学校跡地を掃除し，椅子を設置して会場として使えるようにしました。

ゴミ拾いについては，「まるゴミ防府大道」と言うイベントに参加し，「ともファーム」周辺の道端のゴミを拾いました。その際に現地の方々とお話する機会があり，地域との繋がりの大切さを実感しました。

※7　マルシェの様子

３．今後の展望

私たちの来年度の活動として以下のようなことを計画しています。まず，自動水やり装置を外部でも使用可能な観測育成システムに発展させます。その装置を新たな私たちが管理する農場で実践投入し，育成に必要なデータを収集します。また，水門管理にも着手したいと考えおり，池や田んぼの管理に応用できます。山大のはす池の水位調節に役立てることはできないか模索中です。また，子どもたちにスマート農業を広める活動を，より広いエリアで展開していきたいと考えています。さらに，地域とのつながりをさらに強化していくため，イベントへの参加や，農家さんとの連携も深めていきたいです。以上の活動計画により，山口からスマート農業の研究・普及の輪を広げていき，地域活性化や産業振興，人材育成に寄与していきたいと考えています。

４．参考文献

1）農林水産省「農業センサス」「農業構造動態調査」
2）国立教育政策研究所　「高等学校・生徒調査」
https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/career_jittaityousa/pdf/3_3_3.pdf

おたすけ YU

－YOU おたすけ隊－

代表者　　中山萌々子（人文Ｂ２年）
構成員　　荒川みづき（人文Ｂ２年）瀬戸崎由唯（人文Ｂ２年）木下茉琳（人文Ｂ２年）
多田羅紫（人文Ｂ２年）

１．はじめに

私たち「YOU をたすけ隊」は，山口大学の留学生の皆さんに役立つ情報をまとめたパンフレットを作成し，それを留学生に配布しました。

この取り組みには，大きく分けて 3 つの目的があります。まず 1 つ目は，山口大学の留学生がより豊かな生活を送るために役立つ情報を掲載したオリジナルのパンフレットを作成することです。次に，2 つ目は，パンフレットを作る過程で，留学生の皆さんが抱えている困りごとや，興味を持っている日本文化についてインタビューを行い，日本人学生と留学生との交流を活発にすることです。そして，3 つ目の目的は，完成したパンフレットを通じて，日本人学生と留学生の両方が異文化を理解し合い，より深い交流が生まれることです。

このプロジェクトを通じて，留学生の皆さんがもっと快適に，楽しい学生生活を送れることをサポートできるように 1 年間活動を行ってきました。

２．プロジェクトの背景

渡日サポートボランティアや，留学生サポーターとしての活動を通して，留学生をサポートしたいという学生団体の存在が，留学生にとって非常に心強いものになると感じました。この思いをもとに，手作り感あふれるパンフレットを作成し，留学生に配布することにしました。そうすることで，山口大学の留学生に対して「一人じゃないよ，ここにいるよ」という気持ちを伝えることが目的です。

また，留学開始から時間が経っても，山口大学周辺のおいしい料理店や湯田温泉の由来を知らない留学生が多いことに気づきました。インターネット上の情報ではなく，実際に山口大学で学んでいる学生の声を通じて，留学生に山口の魅力を知ってもらい，好きになってもらいたいという思いが強まりました。

３．プロジェクトの概要

「山口大学の留学生」のための情報をまとめたパンフレットを作成し，留学生に配布します。パンフレットは，来日（4 月，9 月）直後の留学生へのごみの分別オリエンテーションで配布する 2 刊分と，夏，秋，冬に配布するものを含めた合計 5 刊分を作成します。

前者には，生活必需品を揃えるために必要な山口大学周辺の店舗情報や，山口の歴史を中心にまとめます。後者には, 季節ごとの日本文化や留学生からの質問に答えるコーナー, 旅行プランの紹介などを,「やさしい日本語」とイラストを使って分かりやすくまとめます。

４．プロジェクトの魅力

①「山口大学」の留学生の実際の声に基づいて作成された独自のパンフレットは，新しい試みです。
②パンフレットは，留学生が山口大学での生活を振り返る際の記念の品となります。
③日本の特徴の一つである四季に合わせてパンフレットを作成し，配布することで，留学生に日本の文化や風景についてさらに深く知ってもらうことができます。
④パンフレット作成時に行ったインタビューや掲載内容をきっかけに，日本人学生と留学生との交流が活発になります。
⑤「やさしい日本語」の使用により，あらゆる日本語レベルの留学生と日本人が一緒に楽しむことができます。

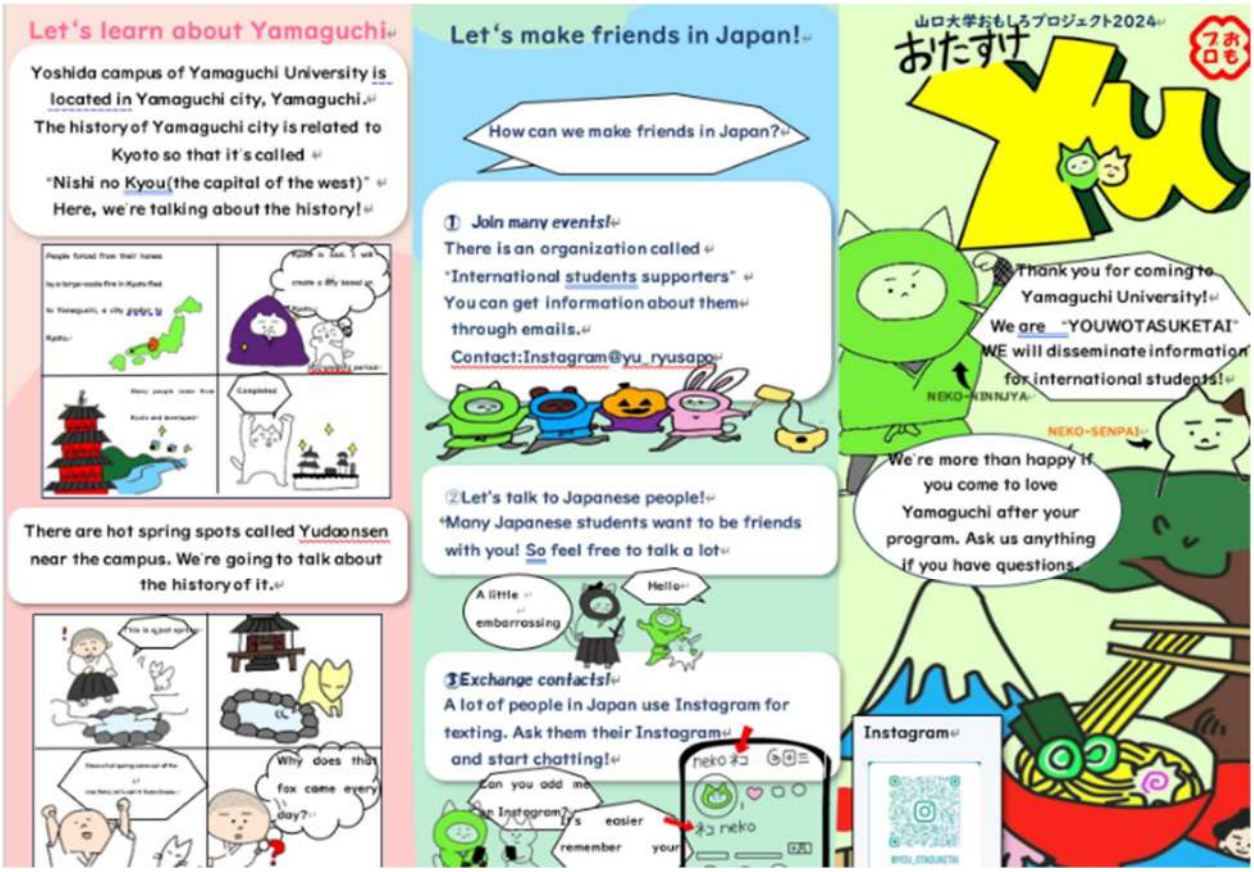
山口大学の留学生の暮らしがさらに良いものになってほしいという熱い思いのもと,「日本らしさ」と「山口大学らしさ」を前面に押し出したパンフレットを作成しました。

パンフレット夏用草案(表)

パンフレット夏用草案(裏)

パンフレット秋・冬用(表)

パンフレット秋・冬用(裏)



英語版来日用パンフレット(表)

パンフレット秋・冬用(裏)

５．留学生からの質問の一例

山口大学の留学生に寄り添えたものにするために，パンフレットの発行に際し毎回留学生からの質問を集めました。留学生からは，「日本人はハロウィンをどうやって祝うの？」，「大学の近くで服を買うならどこがオススメ？」,「どうしてネットで頼んだ荷物が玄関の前に置いてあるの？」,「日本人と仲良くなるにはどうしたらいい？」といった質問があげられました。このように，私たちが予想していた質問ももちろんありましたが，思いもよらなかったような質問や，今まで疑問に思わなかったことに気づかされる場面もありました。これらの質問を通じて，留学生が感じている疑問や不安をより深く理解することができ，とても貴重な気づきを得ることができました。

６．留学生の声

できる限り，留学生一人一人に手渡しすることを心掛けました。その際留学生から「今日，このお店に行ってみようと思う！」,「絵がかわいくて, 見ているだけで楽しい！」,「パンフレットがすごくわかりやすくて助かる！」,「学生のおすすめのお店が知れるのは嬉しい！」というような感想を教えてもらいました。パンフレットの作成は大変でしたが，隅々までしっかり読んでくれたり，ペンで書き込んでくれたり，お礼を言われたりすることがあり，とてもやりがいを感じました。留学生が実際に役立ててくれていることを実感し，その努力が報われた瞬間でした。

７．課題

フィードバックを得るのが非常に難しく，アンケートに答えてくれる人が少ないという問題がありました。しかし，直接留学生に聞くと，みんな積極的に教えてくれることがわかりました。やはり，顔を合わせてコミュニケーションを取ることで，より多くの情報を得られることが実感できました。

また，パンフレットを全員に配布することも大きな課題でした。来日用パンフレットは，留学生のほとんどが参加するごみ分別オリエンテーションで配布できましたが，四季ごとのパンフレットの配布は一斉配布が非常に難しかったです。大学や留学生サポーター主催の多くの留学生が参加するイベントもありましたが，外でのイベントが多く，荷物になるのではないかという理由で配布を躊躇してしまいました。シェアハウスで配布したり，留学生がよく通る場所や日本語の授業がある通路などに置いておいたりする方法も検討したのですが，なかなか実現できませんでした。

これらの経験を通じて，より多くの留学生に届けるために，配布方法を工夫し，さらに広い範囲で配布できるようにする必要があると感じました。

８．良かった点

最初のうちは，パンフレットに手作り感を出すためにアナログで書いたパンフレットの写真を撮り，その写真をパンフレットの用紙に印刷していました。なぜなら，手作りの温かみが，留学生にとって親しみやすいものになると考えたからです。しかし，進める中で，デジタル化することでアナログの良さを残しつつ，より見やすく，伝わりやすいデザインにできることに気づきました。デジタル化することで，イラストの発色がよくなり，文字も整った形で配置できるようになりました。添付の写真「パンフレット夏用草案」と「パンフレット秋・冬用」を比較していただければわかるように，パンフレットがより鮮やかで，読みやすくなったと思います。

また，英語版を作成したことも大きなポイントです。最初にパンフレットを配布した際,「やさしい日本語」を使っても，まだ日本語が難しいと感じる留学生がいることがわかりました。これを受けて，英語版を作成し，より多くの留学生に情報を届けられるようにしました。英語を母国語とする留学生にも対応できることで，全体的により多くの留学生にとって役立つパンフレットになったと感じています。

発行を重ねるごとに，デザインや内容が改善され，見やすさが格段に向上しました。最初の頃は手探りだった部分もありましたが，回を重ねるごとに，どんな情報が留学生にとって最も必要とされているか，どう伝えれば分かりやすいかがわかり，成長を実感できました。

９．感想

このプロジェクトを通じて，留学生と直接触れ合うことができ，私たち自身も多くのことを学びました。最初は不安や課題が多かったですが，留学生からの嬉しい言葉やフィードバックをもらうことで，すごく励まされました。パンフレット作成の過程で，彼らの困りごとや疑問に触れることができ，それに応えられる形で情報を提

供することができたことに，心から充実感を感じています。

留学生の生活が少しでも豊かになり，彼らが日本の文化や山口大学をもっと好きになってくれることを願いながら作ったパンフレット。受け取った留学生が,「これを見て日本がもっと好きになった！」と言ってくれた時は，本当に嬉しく思いました。彼らが少しでも安心して生活できるように，これからもサポートを続けていきたいと思います。

また，このプロジェクトを通じて，私たち自身も異文化理解を深め，視野を広げることができました。今後も，留学生がもっと快適に，楽しく山口大学での生活を送れるように，さまざまなアイデアを形にしていきたいと思います。

１０．謝辞

まず，やさしい日本語の指導をしてくださった中野先生に，心より感謝申し上げます。留学生が理解しやすい言葉を選ぶための貴重なアドバイスをいただき，パンフレット作成に大いに役立ちました。また，授業での配布を許可していただき，実際に留学生に手渡すことができたのは，非常にありがたかったです。

次に，パンフレットのデザイン確認や印刷業者の手配をしてくださった先生方に感謝いたします。何度も添削作業をしていただき，完成度の高いものに仕上げることができました。

さらに,月間報告書に温かい言葉とともにフィードバックをくださったおもしろプロジェクトご担当者様にも，深く感謝申し上げます。いただいた貴重なアドバイスをもとに，プロジェクトがより良い形に進展しました。

これらのご支援とご協力があってこそ,このプロジェクトは成功を収めることができました。皆様のおかげで，留学生の生活を少しでも豊かにできたことを嬉しく思います。今後もこの経験を生かして，さらなる努力を続けてまいります。

今あるものを長く大切に。

－MAISON YMGT－

代表者　　塩田郁哉（工学Ｂ４年）
構成員　　椎山武瑠（工学Ｂ４年）帯刀祐輔（工学Ｂ４年）南慶汰（工学Ｂ４年）
渡邊杏（工学Ｂ３年）鈴木柊登（工学Ｂ４年）

１．概要

１．１はじめに

本プロジェクトの目的は，「衣類の購買意識を見直すきっかけを作る」ことです。私たちは，不要になった衣類を回収し，選別したうえで販売する活動を行っています。また，着られない衣類については専門業者に買い取ってもらい，すべてが有効活用される仕組みを整えています。

この活動を通じて，衣類の処分について考える機会を提供し，リサイクルやリユースを身近な選択肢にしていきたいと考えています。特に，地域の方々と協力しながら取り組むことで，より多くの人にこの問題を伝え，行動の変化を促すことを目指します。また，SNS などを活用し，衣類廃棄の現状や活動の成果を広く発信することで，より多くの人が関心を持ち，参加できる環境を整えていきます。

さらに，フリーマーケットなどで得た収益は，全額を地域に寄付し，衣類の循環だけでなく，地域の活性化にも貢献していきます。本プロジェクトが，多くの方にとって衣類の購入や処分を見直すきっかけとなり，持続可能な社会の実現につながることを願っています。

プロジェクトのメンバー

１．２プロジェクトの背景

日本の家庭から出る衣類廃棄物は年間 75.1 万トン（2020 年時点）にのぼり，その約 66%が焼却・埋め立て処分されています。近年，インターネットショッピングの普及により，安価な衣類が気軽に購入・廃棄される傾向が強まり，衣類の消費と供給が繰り返されることで，廃棄問題の深刻化が懸念されています。

そこで，本プロジェクトでは，不要になった衣類が新たな持ち主へと渡る体験を提供することで，衣類の行く先を意識し，購買行動を見直すきっかけを作ることを目指しました。地域の方々とともにこの取り組みを進めることで，衣類を「捨てる」から「活かす」という意識へと変えていきたいと考えています。

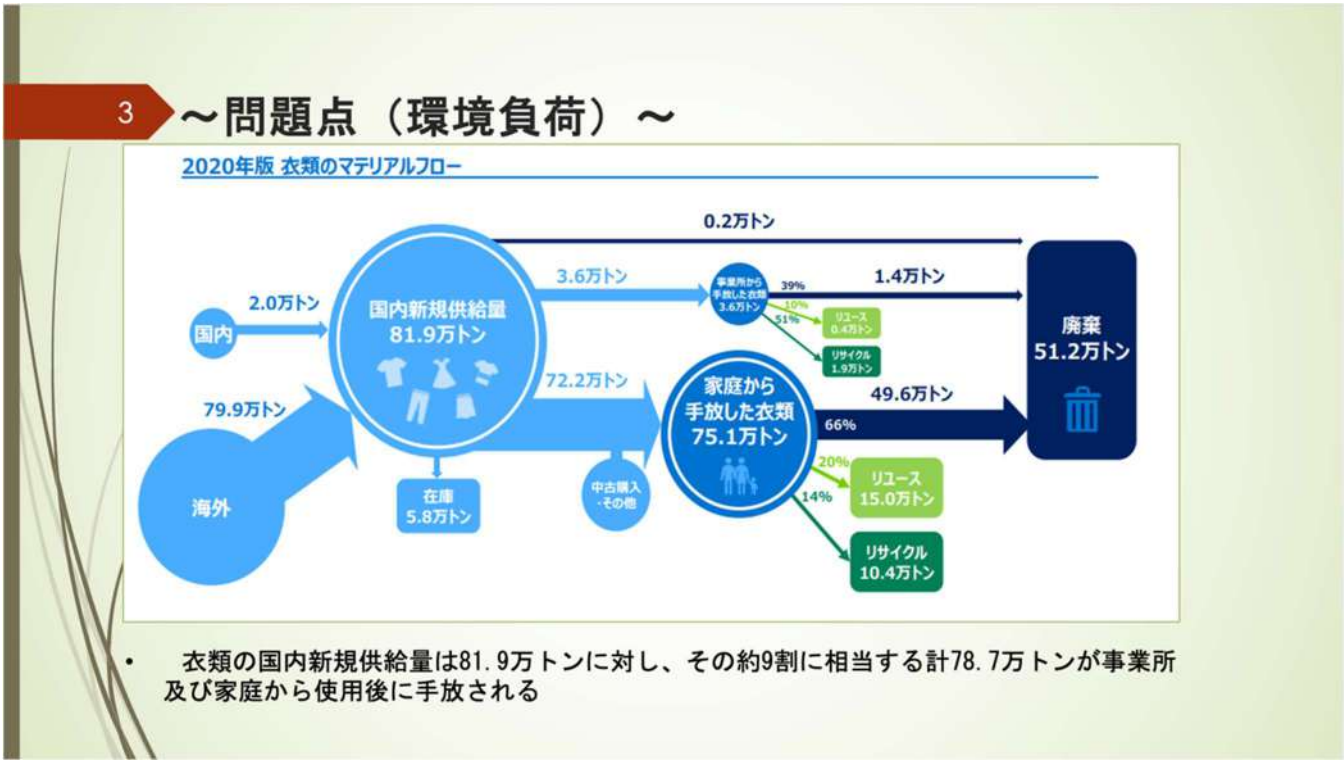
１．３私たちのきっかけ

本プロジェクトを立ち上げるにあたり，私たち自身がなぜ購買意識を見直す必要性を感じたのかを綴ります。

一つ目のきっかけは，本プロジェクトにご尽力いただいた樋口教授が開講されている「環境倫理・法規」の講義での学びです。特に，山口県産業廃棄物協会との合同授業では，現場で働く方々の話を直接伺い，衣類廃棄の深刻な現状を知る機会を得ました。そのなかで，「知識として学ぶだけでなく，実際に行動に移したい」と強く感じました。

二つ目は，私自身（塩田）の経験です。自身の家庭では，着なくなった服をすぐに処分し，新しいものを購入することが当たり前でした。これまでその行動に疑問を持つことはありませんでしたが，衣類廃棄の実態を知ることで，自身の消費行動を見直す必要性を痛感しました。

こうした気づきを，私たちだけでなく，多くの人と共有し，購買意識を変えるきっかけを作りたいと考え，本プロジェクトは始まりました。



実際に講義で使用したスライドの一部

２．活動内容

２．１情報発信

本プロジェクトの目的である「衣類の購買意識を見直すきっかけを作る」ためには，まず活動の存在を知ってもらうことが重要でした。そのため，情報発信に力を入れ，認知度の向上を図りました。

具体的には，チラシの制作や SNS（Instagram）の運用に取り組みました。自分たちでデザインしたチラシを，宇部市内の飲食店やコンビニエンスストアに掲示していただき，多くの方に活動を知ってもらう機会を作りました。さらに，SNS では活動の詳細や衣類廃棄問題について発信し，より幅広い層へ情報を届けることを目指しました。

地域の方々の協力のおかげで，活動への関心が高まり，多くの方が SNS を通じて情報を得るようになりました。こうした情報発信の積み重ねが，プロジェクトの目的達成へとつながっていくと実感しました。

実際に掲載していただいたチラシ

２．２古着回収イベントの実施

令和 6 年 10 月 6 日，フジグラン宇部のご協力のもと，古着回収イベントを開催しました。このイベントは，フジグラン宇部のご担当の方と直接お話しをし，私たちの活動の趣旨に賛同いただいたことから実現しました。

当日は，予想を上回る多くの方が不要になった衣類を持参してくださいました。家族連れや学生，ご年配の方まで幅広い世代の方々が参加し，それぞれの思いとともに衣類を託してくれました。「まだ着られるけど，もう使わないから誰かの役に立てば」「こうした取り組みがあることを知らなかった」といった声も寄せられ，私たちの活動が少しずつ地域に広がっていることを実感しました。

また，衣類を回収するだけでなく，地域の方々と直接交流し，本プロジェクトの目的や背景を伝える貴重な機会にもなりました。環境問題や衣類のリユース・リサイクルについて，関心を持つきっかけになったと話してくださる方も多く，情報発信の大切さを改めて感じました。

今回のイベントを通じて，約 400 着もの古着を回収することができました。また，衣類の購買意識を見直す第一歩となるきっかけを提供できたのではないかと考えています。今後もこのような活動を継続し，より多くの方に衣類廃棄の現状を知ってもらい，リユースの輪を広げていきたいと思います。

古着回収イベントの様子

２．３古着の選別作業

回収した古着の状態を確認し，それぞれの販売価格をメンバーで慎重に決定しました。予想を大きく上回る量の古着が集まり，仕分け作業は想像以上に大変なものでした。しかし，一着一着の状態を確認し，どのように活用するかを話し合いながら進める作業は，ただの選別以上の意味を持っていました。作業を終えたときには，私たち自身の手で新たな価値を生み出したという大きな達成感を得ることができました。

回収した衣類を無償で提供するのか，それとも値段をつけて販売するのかは，非常に悩んだポイントでした。無償提供は誰にとっても負担がなく，多くの人に届けられる方法ではあります。しかし，衣類に対する購買意識の変革という観点から見ると，無料で手に入るものは大切に扱われず，結果としてすぐに廃棄されてしまう可能性があるのではないかと考えました。そこで，最終的に 500 円から 2,000 円の範囲で安価に販売するという方針を決定しました。

この価格設定には，衣類を「商品」として認識し，大切に着続けてもらうという狙いがあります。例えば，何の負担もなく手に入る衣類よりも，自らの意思で購入したもののほうが，より長く大切にされる傾向があります。そのため，適正な価格を設定することで，衣類を使い捨てにせず，長く愛用してもらえる環境をつくりたいと考えました。

さらに，このプロジェクトが単なる古着販売ではなく，学生主体の活動であり，回収・選別・販売のすべてを手がけた「ストーリーのある衣類」であることも価値のひとつです。このような背景を伝えることで，購入者の方にも「ただの古着」ではなく，「誰かが必要としていたものを，自分の手で受け継ぐ」という意識を持ってもらえるのではないかと考えました。

この活動を通じて，単なる衣類の回収・販売にとどまらず，購買意識の変革や持続可能な消費の在り方について考える機会を提供できればと願っています。

２．４姫山祭フリーマーケット出店

令和 6 年 11 月 3 日，山口大学の姫山祭に出店し，フリーマーケットを開催しました。本プロジェクトの一環として，事前に回収・選別した衣類を販売し，多くの方に手に取ってもらう機会を提供しました。特に学生を中心に，多くの来場者が訪れ，衣類のリユースに関心を持ってくださいました。

今回のフリーマーケットでは，ただ衣類を販売するだけでなく，衣類廃棄の現状やリユースの重要性を伝えることも目的としていました。実際に商品を手に取ってもらいながら，不要になった衣類がどのように活用されるのかを説明することで，多くの方に関心を持っていただけました。来場者からは，「すぐに服を捨てるのをやめようと思った」，「この活動についてもっと知りたい」，「来年もぜひ開催してほしい」といった声をいただき，本プロジェクトの意義を改めて実感しました。

また，同じ学生として，同世代の方々に直接話を伝えられたことも大きな成果の一つです。学生は特に流行や価格の影響を受けやすく，気軽に衣類を購入しがちですが，その一方で環境問題への関心も高まっています。実際に服を見て選び，購入する体験を通じて，衣類を長く大切に使うことの大切さを伝えることができたと考えています。

本プロジェクトは，ただ衣類を回収・販売するだけでなく，「衣類の購買意識を見直すきっかけを提供すること」を目的としています。今回のフリーマーケットがその第一歩となり，多くの人が「服の捨て方・買い方」について考える機会となれば嬉しく思います。今後も，より多くの方にこの活動を広め，持続可能な消費行動を促進していきたいと考えています。

尚，今回の姫山祭フリーマーケットで得られた収益は 22,500 円でした。

姫山祭フリーマーケットの様子

２．５「ススメ！工学部」出演

令和 6 年 12 月 5 日，FM きららのラジオ番組「ススメ！工学部」に塩田と鈴木が出演しました。番組では，ラジオパーソナリティの方とともに，本プロジェクトのこれまでの取り組みや今後の展望についてお話ししました。

特に，活動を始めたきっかけやその目的について深く掘り下げる機会をいただきました。なぜこの活動を立ち上げたのか，どのような想いで取り組んでいるのかを丁寧にお伝えすることで，より多くの方に共感し，関心を持っていただけたのではないかと感じています。

ラジオという媒体を通じて，私たちの活動を幅広い層の方々に発信できたことは，大変貴重な経験となりました。限られた時間ではありましたが，多くの方にメッセージを届けることができ，大変嬉しく思っています。貴重な機会をいただいた FM きららの皆様，そしてお聞きくださった皆様に，心より感謝申し上げます。

ラジオ放送時の様子

２．６ときわ公園フリーマーケット出店

令和 6 年 12 月 15 日，宇部市ときわ公園で開催されたフリーマーケットに出店しました。あいにくの悪天候に見舞われ，正午までの短時間の出店となりましたが，それにもかかわらず多くの方々が足を運んでくださいました。

今回のフリーマーケットでは，特に地域の方々との交流が印象的でした。これまでの活動では学生との関わりが中心でしたが，今回は幅広い世代の方々と直接お話しする機会を得ることができました。特に年配の方々との対話を通じて，衣類の再利用に対する考え方や，昔の衣類を大切にする習慣について学ぶことができ，大変貴重な経験となりました。

また，多くの方から衣類の値段設定についての質問をいただきました。「なぜこの価格なのか？」という疑問に対して，単に安価で提供することが目的ではなく，衣類の価値を再認識し，長く大切に着てもらうことを目指していることを丁寧に説明しました。実際に私たちの考えに共感し，「こういう取り組みは素晴らしい」，「また次回もぜひ出店してほしい」といった温かいお言葉をいただき，大きな励みとなりました。

今回の出店を通じて，衣類の購買意識を見直すきっかけを作るという本プロジェクトの目的を，より多くの人に伝えることができたと感じています。 短い時間ではありましたが，多くの学びと気づきを得る貴重な経験となりました。今後も，このような機会を大切にしながら活動を続けていきたいと考えています。

尚，今回のときわ公園フリーマーケットで得られた収益は，53,950 円でした。

ときわ公園フリーマーケットの様子

２．７川野商店へ古着持参

令和７年２月 17 日，これまでの活動で余ったすべての古着を川野商店に持参しました。着用可能な衣類だけでなく，傷みが激しく着ることができない衣類も含め，すべての衣類を資源として有効活用することを目的としています。

今回，回収された衣類のうち，まだ着用可能なものは東南アジアへ輸送され，リユースされます。一方，着用が難しい衣類については，工業用ウエスへとリサイクルされ，新たな形で活用されることになります。

これにより，私たちが回収した衣類は一切無駄になることなく，すべてが適切な形で再利用・再資源化されました。本プロジェクトの目的である「衣類の購買意識を見直すきっかけを作る」に加え，衣類の持続可能な活用方法についても実践を通じて学ぶことができました。今後もこうした取り組みを継続し，より多くの方に衣類の循環型消費の重要性を伝えていきたいと考えています。

尚，川野商店さんに買い取っていただいた衣類の総額は 1,250 円でした。

川野商店への古着持参

２．８宇部市への寄付

令和７年２月 28 日，本プロジェクトで得られた収益を宇部市に寄付しました。この寄付は，地域貢献を目指す活動の一環として行ったものであり，ふるさと納税制度を活用しました。寄付先は，宇部市が取り組むさまざまな地域振興や福祉事業への支援となります。

具体的には，寄付金は「子ども医療扶助金」や「プロスポーツイベント運営費」，また「中心市街地活性化事業経費」といった，地域の発展に直結する重要な活動に使われることとなります。これらの活動は，地域の未来を支えるために必要な事業であり，寄付が少しでもその一助となることを願っています。

２．９宇部市感謝状贈呈式

令和７年３月 24 日，宇部市感謝状授与式に出席させていただきました。この式典では，宇部市藤崎副市長と直接会談する機会をいただき，私たちのプロジェクトについて詳しくお話しさせていただきました。藤崎副市長からは，宇部市としてもごみ問題に力を入れて取り組んでいるとのお話を伺い，私たちの活動に対して激励のお言葉をいただきました。そのお言葉は，活動を続ける励みとなり，大変貴重な経験となりました。

私たちの活動が，少しでも地域のごみ問題の改善に寄与できることを願っています。授与式には，宇部日報の記者の方も来られており，私たちの活動について取材を受けました。取材内容は，後日宇部日報に掲載される予定です。このような機会を通じて，私たちの取り組みがより広く地域社会に伝わることを嬉しく思います。

感謝状授与式

発表用ポスター

３．謝辞

今回のプロジェクトにあたって，常に適切な助言を提示してくれた九州産業大学の安部智憲さんに深く感謝申し上げます。また，多くのご指導をいただいた山口大学工学部の樋口教授に深く感謝申し上げます。並びに，樋口教授と共に活動のきっかけを与えてくださった山口県産業廃棄物協会の方々に深く感謝申し上げます。また，この活動を進めていくにあたって，多くの方にご協力いただきました。山口大学学生支援センターの石井さん，山口大学施設企画課の鳥越さん，山口大学工学部学務科学生係の大川さんに適切なご助言をいただきました。

地域の方にも多くのご協力をいただきました。フジグラン宇部店副店長の方，ときわ公園フリーマーケット代表の方，川野商店代表取締役の川野さん，宇部市藤崎副市長に多くのご協力いただき，私たちの活動を応援してくださいました。

最後に，この活動に関わってくださった全ての方々に深く感謝申し上げます。本当にありがとうございまし

た。

防府農地再生プロジェクト

ーだおらーずー

代表者　　中森詩音（経済Ｂ３年）
構成員　　LEE DONGWOO（経済Ｂ４年）磯部仁（経済Ｂ３年）田野岡大季（経済Ｂ３年）
富永愛実（経済Ｂ３年）

１．プロジェクト概要

本プロジェクトは防府市内の遊休農地問題，　小学生の地域イベント参加率が全国平均より低いという問題を解決するためのものである。防府市内にある遊休農地を借り，　地域の小学生を対象とした耕作体験の機会を設ける。また，小学校の自由科目の一環として小学校とも連携することでイベントへの参加を促し，耕作に対する興味を育む機会とする。さらに，このプロジェクトに参加した児童が，次年度以降，次の参加児童に教える機会を設けることで，イベント継続することが可能となる。

２．プロジェクトの背景・目的

1 月に防府市内の視察を行った際に，現在利用されていない農地である遊休農地の多さが印象に残った。また，防府市について調べる中で，小学生の地域行事に参加している割合が全国平均を下回っていた。私たちは以上の 2 つを防府市の課題として考え，遊休農地を活用した小学生対象の耕作体験イベントの開催を企画した。

本プロジェクトの目的は二つの地域課題を解決することである。一つ目は遊休農地の増加，　農業継続の問題である。二つ目は全国平均より低かった小学生の地域イベント参加率である。遊休農地を農地に戻すのも重要であるが，　今ある農地を守ることも大事である。また，　地域の小学生が地域のイベントに参加することで，自分が住んでいる地域との絆を作ることにより，　地域の若者流出も防げると考え，以上を本プロジェクトの目的とする。

３．実施計画

①防府市内の遊休農地を借りる
②遊休農地の整備
③小学校と連携
④イベントの開催（植え付け・収穫）

４．活動内容

まず，6 月にイベントに使用する農地の視察を行った。また，視察と同時に防府市で造園業をされている方にご協力いただき，農地の一部を耕し，試験的にさつまいも・オクラ・ひまわりの植え付けを行った。しかし，雨が降ると土地に水が溜まり，その水が何日も抜けない状態となったため，この土地は農作物を育てるのには向いていないと判断し，新たな土地での作業に移行した。新たな農地は防府市立右田小学校近くの土地となったが，前回の土地と同様に整備されていない状態であったため，草刈りや土地の耕しからスタートした。また，右田小学校近くの土地を利用できるということもあり，右田小学校の児童がイベントに参加できないか計画を立て，小学校と話し合いをし，一緒にイベントを行えることとなった。

イベント開催土地

次に，9 月 20 日に第 1 回目のイベントを実施した。事前準備として，雑草除去や防草シートの設置，今回イベントで育てるジャガイモの苗の準備を行った。ジャガイモの苗は気候の問題等もあり，イベントまでに届かないことがあったが，別のサイトや店で探し，確保することができた。今回のイベントでは，右田小学校の 3 年生 109 名が総合学習の時間として参加していただけることになり，ジャガイモ 30kg の植え付けを行った。3 クラス順番に作業を行い，植え方の説明をした後に実際に植える体験を行ってもらった。作業している小学生は，友達同士やサポートする大学生と楽しそうにコミュニケーションを取りながら作業していた様子であり，とても賑やかなイベントとなった。

植え付けイベントの様子

イベント後には，雑草が増加し続けていたため追加で防草シートを購入し，ジャガイモがきちんと育つように管理を行った。さらに，今回のプロジェクトを地域の方に広く知っていただくために看板の設置を行った。本プロジェクトでは，土地の耕しに協力してくださった羽嶋松翠園の方や，看板設置に協力してくださったひまわり工房の方など，防府市の企業がスポンサーとしてサポートしてくださっている。看板の設置後，より一層このプロジェクトを成功させるために次のイベントに対して計画を立てていった。

プロジェクト看板

定期的に苗や土地の管理を行ったことにより，12 月 6 日に収穫イベントを開催することができた。

収穫イベントでは，植え付けのイベント同様，右田小学校の 3 年生 109 名を中心に先生方や，本プロジェクトのスポンサー企業のうち 3 社の方にも参加していただいた。イベントの前半には 3 社の方が企業説明として，防府市でどのような事業をしているのかなどを説明していただき，小学生と一緒に学ぶことができた。イベントの後半では育てたジャガイモの収穫を行った。今回は 3 クラス同時に収穫を行った。自分たちで育てたジャガイモを自分たちの手で収穫するイベントでは，ジャガイモの大きさや形をみんなで比べながら収穫したり，大学生とたくさん話したりして楽しいイベントとなった。

収穫イベントの様子

収穫したジャガイモ

集合写真

収穫したジャガイモは今回参加していただいた小学生やスポンサー企業の方に持ち帰っていただき，残りは防府市のスーパーで販売を行った。その際に，POP や説明などを小学生に作成してもらい，地域の方にプロジェクトの存在を知ってもらう機会となった。また，売上金については今回参加していただいた小学校へ寄付を行った。今回のプロジェクトを通して，自分たちで育て，収穫・販売することによって，農業の大まかな流れを体験でき，農業に対して興味を持つきっかけとなったと感じる。

スーパーでの販売 1

スーパーでの販売 2

５．感想

今回のプロジェクトを計画し，実施したことによって，私たち自身も農業の大変さや喜びを体験できた非常に良い機会となった。農業に適していない土地であったり，気候による農業への弊害があったり，様々な課題があったが，その課題１つ１つについて話し合い，解決することによって，農業はもちろんプロジェクトを無事に終えることができた達成感を味わうことができた。そして，何より参加してくれた小学生が楽しみながら農業に触れている様子を実際に目にすることができ，プロジェクトの成功を実感できた。

ほとんどのメンバーが農業については何もわからない初心者であったため，手探りの状態で始めることに不安もあったが，防府市の方や企業の方などたくさんの方に協力していただくことによって，プロジェクトを進めることができたと感じている。今後もこのご恩を忘れず，地域のために行動していこうと感じた。

農ある私たちはお野菜を見せびらかす

ー新長州ファイブー

代表者　　石飛知憲（工学Ｂ３年）
構成員　　甲斐大駆志（工学Ｂ３年）益晴人（工学Ｂ３年）伊藤紘平（工学Ｂ３年）
菅祥英（工学Ｂ３年）嶋津虎彦（工学Ｂ３年）
吉光南人（工学Ｂ３年）本永悠太郎（農学Ｂ１年）
衣川愛香（理学Ｂ１年）前田綾（理学Ｂ１年）

１．はじめに

本プロジェクトでは，農業と IT を通じた地域活性化と子ども支援活動を行いました。団体の活動は 3 年目で，耕作放棄地だった田んぼを畑に転用し，約 2,000 ㎡の広大な農地を活かしたイベントや特徴的な作物の栽培を行っています。活動理念として，「大きい」，「かっこいい」，「世界一辛い」など，インパクトのある作物を育てることで，私たち自身も楽しみながら活動することを大切にしています。

２．活動目的

本プロジェクトの目的は，農業と IT を通じた地域活性化と子ども支援活動です。地域活性化に関しては，ビアガーデンやしば学祭などのまちづくりイベントに参加し，私たちの特色を活かした出展でイベントを盛り上げることを目指します。子ども支援活動では，農業体験イベントを実施し，地域の子どもたちが自然と触れ合いながら学べる場を提供します。また，子ども食堂への農作物の提供や運営を通じて，子どもたちの健やかな成長と食育を支援します。さらに，収穫物の一部を道の駅や JA で販売するほか，医学科の新薬研究団体へ試料を提供するなど，農業を軸に幅広い活動を展開していきます。

３．活動内容

３．１巨大カボチャの栽培

アトランティックジャイアントという巨大なカボチャの栽培を行いました。昨年度は病気が多発し，肥大化させることができませんでしたが，今年度は徹底した環境整備と計画的な防除により，最大約 50kg の巨大カボチャの栽培に成功しました（図 1）。収穫後は宇部市中央町で開催されたビアガーデンの目玉展示として出展し，イベントの盛り上げに貢献することができました（図 2）。また，工学部キャンパス内にハロウィンの飾り付けをして展示しました（図 3）。

図 1　巨大カボチャの収穫

図 2　ビアガーデンでのカボチャ出展

図 3　工学部内でハロウィン装飾されたカボチャ

３．２「IT×農業」子どもプログラミングイベント

昨年度に引き続き，山口大学工学部ものづくり創生センター・宇部高専・宇部市と共同で，IT×農業をテーマにした子どもプログラミングイベント「スマートプレイふぁーむ」[1] を開催しました（図 4）。このイベントでは，マイコンやドローンなどを使い，子供たちの自由な発想から生まれた畑に関する遊びや発明を，プログラミングによって現実のものにし（図 5），さらに，畑で実際に発表し，みんなで使って遊ぶところまでを行いました。今年度の作品は，害獣避けアラーム，マイコンから操作するドローンによる空中探索，虫集め競争などがありました。子どもたちの思いをなるべく実現できるよう自由度を大切にしつつ，事前の徹底した安全対策と準備を行うことによって，スムーズな運営を行うことができました。このイベントの様子は，宇部日報にも掲載されました[2]。

図 4　第 2 回 スマートプレイふぁーむ 集合写真

図 5　マイコンをプログラミングしている様子

1）令和 6 年度スマートプレイふぁーむ　http://www.mono.eng.yamaguchi-u.ac.jp/supportproject/challenge.html
2）IT で農業課題の解決を，子どもプログラミング教室（宇部日報デジタル 2024 年 8 月 13 日）
https://ubenippo.co.jp/2024/08/13/4002362/

３．３古民家と子ども食堂

地域の NPO 団体と共同で古民家を改装し，子ども食堂やイベントが出来るスペースの構築を行いました。飲食店としての営業許可を取得し，子ども食堂のプレ実施を 2 回行うところまでたどり着くことができました（図 6）。一度に 20 人ほどの利用者がいるという想定で，募集・食材調達・調理・片付けなどの運営の流れと必要な人員やコストを把握することができました。

図 6　子ども食堂の外観

３．４地域イベントへの参加

宇部市中央町の活性化を目的にイベントを開催している「まちなかイベント実行委員会 [3)]」に参加し，イベントの企画や運営の補助を行いました。また，野菜の出店も行いました。同じく中央町で山口県内の学生が学校・専攻の垣根を越えて開催した「しば学祭 [4)]」では，企画の初期段階から関わるとともに，団体として初めての飲食店の出店を行いました（図 7）。コンフリ宇部 [5)] の方の全面協力により，自家製パパイヤに漬けて柔らかくしたタンドリーチキン，自家製サツマイモ入りカレー，手作りナン，自家製サツマイモチップスの 4 品を販売することができました。

図 7　しば学祭で出店した飲食店

3）まちなかイベント実行委員会　https://yccu.place/machinaka/
4）しば学祭　https://yccu.place/20240928/
5）コンフリ宇部 https://www.instagram.com/conflictablecube_ube/

３．５日常管理と販売

今年度は，70 種類以上の作物を効率的に栽培するため，徹底した管理を行いました。こまめな草刈りや除草，防除を行い，昨年度とは比較にならないほどの収量を得ることができました。機械や薬剤を使う危険の伴う作業も多いため，日頃から点検・整備の徹底と安全対策の継続的な改善を行っています（図 8）。また，JA の朝市や新鮮館に定期的に作物の出荷を行いました（図 9）。少額でも継続的な収入があることで，活動の持続性をより強固なものにすることができました。

図 8　エンジンポンプの分解整備の様子

図 9　朝市の出荷準備

４．課題と展望

今年度団体として関わった主なイベントは，来年度以降も継続する方針です。今年度の子ども食堂のプレ実施では，利便性と公益性のバランスに関する問題が浮かび上がりました。現在は，定期的な実施を目指して調整中であり，令和７年中頃には結論が出る見通しです。作物については，昨年度比では大成功であったものの，特に病害についての対策が後手に回りがちであったため，今後は病害発生前の予防的処置を検討するとともに，圃場の周辺環境整備も含めた総合的な防除を行います。また，これまで培ってきた知識や経験を，他の学生団体や地域へ直接還元することにも取り組んでいきます。

５．おわりに

今年度は，活動規模の拡大もあって決して順調とは言えない一年でした。運営面では至らない点も多く，度重なるご迷惑やご心配をおかけしたことと思います。それでも活動を継続し，新たな挑戦を行うことができたのは，支援教員の小柴先生をはじめ，コンフリ宇部の代表の方，JA 山口県宇部支所の方，まちなかイベント実行委員会の皆様など，多くの方々のご理解とご協力のおかげです。また，山口大学おもしろプロジェクト，山口大学基金，山口大学工学部常盤工業会の皆様のご支援にも，心より感謝申し上げます。この場をお借りして，改めて御礼申し上げます。

商店街活性化で地域も明るく

ーストリーターズー

代表者　　髙木結葵（経済Ｂ３年）
構成員　　安部湧豊（経済Ｂ３年）今野歳三（経済Ｂ３年）川平日菜（経済Ｂ３年）
水野椋太（経済Ｂ３年）

１．本プロジェクトについて

私たちは，防府市の天神町銀座商店街の賑わいを取り戻し，防府市の活性化に貢献することを目的に「商店街活性化で地域も明るく」というスローガンのもと，約7か月活動してきました。商店街の活性化のためには，地域の関係者との協力が不可欠であり，商店街における問題点やニーズを把握することが重要であるため，私たちは，商店街の関係者にインタビューを行い，商店街の現状を把握したうえで，イベントを企画しました。その結果，商店街の課題や必要なサポートを認識したうえで，具体的な解決策を模索していきました。

２．プロジェクトの概要

２．１商店街の関係者へのインタビュー

まず，商店街の課題を明確にするために，商工会議所の方や商店街の店舗オーナーの方々にインタビューを行いました。商工会議所の方へのインタビューでは，商店街の収益性の問題が浮かび上がりました。新規出店者が店舗を開くためには，高額な内装費用が必要で，その負担が大きな課題となっていることが分かりました。出店には，内装費用として500万円から1,000万円が必要で，その費用を5年から10年で回収しなければならないため，出店を躊躇する事業者も多いということも分かりました。しかし，新規で出店された店舗の中には，「よりみちCafé fucali」のように，オープンしてから10年以上経った現在でも売上が落ちず，成功している事例や，「ほふほふ」のように商業目的ではなく，コミュニティの場として店舗を運営しているお店もあるということが分かりました。次に，先ほどのインタビューで知ることができた，「よりみちCafé fucali」の方や「ほふほふ」の方にインタビューを行い，商店街でのイベントを行ううえで必要なアドバイスを得ることができました。例えば，イベントを開催する際には，事前に各店舗に挨拶に行くことが重要であるということが分かりました。

２．２フォトスポットの設置

以上のインタビュー等を通して，私たちは，商店街に新たな集客を促すためのアイデアとして，「フォトスポット」を商店街に設置することにしました。当初は，商店街の建物の外に設置する予定でしたが，建物の外では，毎回フォトスポットを建物の中に収める必要があるなど，様々な問題があったため，建物内にフォトスポットを設置する方向性で企画しました。最終的に，商店街内の「種田家具防府店人形館」（以下，人形館と表す）をお借りすることができ，人形館内の約6畳分にフォトスポットを作成しました。フォトスポットを作成するにあたり，事前に建物内の寸法を測り，どのようなデザインにするのかをメンバー全員で考えました。考えたデザインは，まず床に白い木目のフロアタイルを貼り，天井には約50束のドライフラワーと風船を吊り下げて，壁にカーテンを貼るというもので，ドライフラワーと風船をひもで縛って，脚立を使って天井に吊り下げるという作業が特に大変で，最初はどうしたら上手く吊り下げられるかがわからず，試行錯誤しながら進めていきました。

２．３サービス券配布に向けての取り組み

このプロジェクトでは，当初，フォトスポットに加えて商店街で使えるサービス券を配布しようと考えていました。具体的には，イベント期間にフォトスポットで写真を撮ってくださった方に，その撮った写真を商店街の店舗で会計時に提示してもらうことによって，店舗に応じたサービスを受けられるという仕組みで行おうと企画していました。しかし，このサービス券を出しても現在の商店街の店舗に集客力がないため，サービス券が無駄になってしまうのではないかなど，サービス券の必要性を十分に商店街の店舗さんたちに説明することができず，最終的にサービス券の協力店舗は0店舗となってしまい，フォトスポットのみでイベントを行うことに決めました。

２．４イベントの開催

イベントは，11月16（土），17（日），20（水），23（土），24（日）日の5日間行いました。開催期間をこの5日間に決めた理由は，16，17日には，「すごいぞ！防府秋の大イベント」が開催され，23，24日には防府市の大きな祭りである「裸防祭」「天神おんな神輿」が開かれたというように，防府市でのイベントが立て続けに行われた週であり，より多くの集客を見込めると考えたためです。また，イベントと同時に商店街の交通量調査も行ったため，週末だけでなく平日の交通量も記録したかったため，平日である20日にもイベントを開催しました。フォトスポットの来客数（人形館内に入って実際にフォトスポットで写真を撮ってくださった方の数）は，16日は12人，17日は16人，20日は2人，23日は44人，24日は7人でした。23日は防府市の中でも大きな祭りが行われたため，その日の通行者数は平日である20日の6倍以上もありました。（図1）さらに，フォトスポットの来客者には，親子連れが多い印象で，実際に，全28組のうち，19組が親子連れでした。イベント時には，ポスターを掲示しながら呼び込みを行っていたのですが，ポスターに書いている情報が不十分であることなどが原因で，なかなか呼び込みが上手くいかなかったため，通行人がフォトスポットに立ち寄りたいと思えるような工夫が必要だったと感じました。

３．まとめ

12月6日にフォトスポットの片づけを行って私たちの主な活動は終了しました。今回のフォトスポットを作成するうえで，商店街の理事長である種田さんが，人形館を私たちに活動場所として提供してくださり，そのうえ好きに使って良いし，片付けもそんなにする必要はないとおっしゃっていただき，とても活動しやすかったので，想像以上のフォトスポットができたと感じています。また，脚立や掃除道具もお借りすることができたので，その分予算をドライフラワーに充てることができました。さらに，商工会議所の方や商店街の店舗の方々が，私たちのために時間を作って商店街に関するさまざまな情報を教えてくださったことで，イベント企画をよりスムーズに行うことができたし，私たち自身の勉強にもなりました。イベント時に同時に行った交通量調査に関して，商店街や防府市への少しの恩返しとしてお渡しすることができたのはとてもよかったと思っているし，その交通量調査が今後の防府市の発展の手助けになれば良いなと思います。

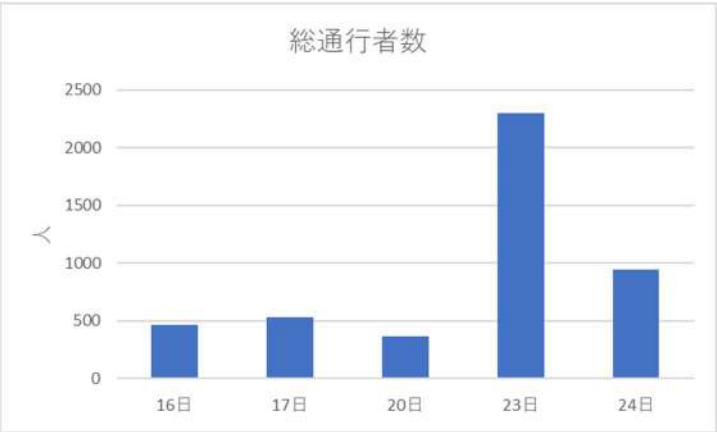


図1　イベント開催期間の商店街通行者数

フォトスポットのデザインおよびイベント時の様子

地域に根ざしたイルミネーションをしよう！

ーブラッシュアップ・ヤマグチー

代表者　　池田真一朗（経済Ｂ２年）
構成員　　藤田真凪（人文Ｂ２年）岩瀬陽希（人文Ｂ４年）堂本悠太（人文Ｂ４年）
瞿豪（人文Ｂ４年）楢崎桜花（人文Ｂ４年）
前川大知（理学Ｂ４年）中村雛子（人文Ｂ２年）
他３８名

１．プロジェクト概要

本プロジェクトは「山口市がクリスマス発祥の地」であることを山大周辺地域の方々のみならず，より広範囲の地域の方や山口に訪れた観光客の方にも知ってもらうために企画したものである。例年の山口大学吉田キャンパス正門へのイルミネーションに加え，防長交通㈱山口営業所に協力を依頼し，既に 12 月の山口市を走っている「クリスマスバス」のパワーアップを行う。一昨年および昨年度の活動においては，山口大学の学生ならびに大学周辺地域にお住まいの方々を主な対象として取り組みを行ってきた。しかし本年度は，より多くの地域住民や関係者に活動の裾野を広げるべく，対象範囲を拡大し，広域的なアプローチを試みた。

２．プロジェクトの目的

本プロジェクトは，地域住民のみならず観光客にも山口の魅力を再認識してもらうとともに，「山口が日本のクリスマス発祥の地である」ことを広く知ってもらうことを目的としている。昨年度までの活動を通じて，山口大学の学生をはじめとした学生層には一定の認知が広がっていることが確認できた。

そこで本年度は，これまでの学生中心の対象から，地域住民および観光客へと対象を拡大し，より広範囲なアプローチを試みた。特に観光客を対象とした背景には，「ニューヨーク・タイムズ紙」において山口市が「2024 年に訪れるべき場所」第 3 位として紹介されるなど，今後観光客の増加が見込まれるという点がある。

観光客にアプローチすることで，山口の魅力をより広く発信することが可能になると考えた。その手段の一つとして，地域住民や観光客が日常的に利用することが見込まれるバスを活用し，車内外をイルミネーションで装飾する取り組みを企画・実施した。

３．活動方法

昨年度に引き続き，本年度も主な活動場所として，山口大学共通教育棟の教室および山口市平川地域に所在する賃貸アパートを使用し，各種活動を実施した。活動頻度としては基本的に月・金とし，週に 2 回活動を行った。また，各種相談やミーティングなどは自主活動ルームを利用させていただくこともあった。その他やり取りは基本的にメールや電話を利用した。

４．主な活動内容

本プロジェクトは主に以下のとおり，山口大学吉田キャンパス正門イルミネーション，クリスマスバス装飾の二つの活動に分けられる。

４．１山口大学吉田キャンパス正門イルミネーション

点灯期間を 2024 年 12 月 2 日（月）～12 月 25 日（水）までとし，点灯時間を 17 時～21 時までとして，様々なイルミネーション装飾を施した。

以下，準備期間・点灯期間・撤去期間に分けて活動内容を記していく。

４．１．１準備期間

準備期間においては，主に⑴イルミネーションの装飾内容の決定，⑵材料の発注，⑶イルミネーションの加工，⑷イルミネーションの取り付けを行った。

⑴ イルミネーションの装飾内容の決定

イルミネーションの装飾内容の決定では，8 月～10 月ごろ共通教育棟教室や契約している賃貸アパートを利用して話し合いを行った。話し合いの進め方としては各々でどのようなイルミネーションをやりたいか，どのようなコンセプトを持たせたいかなどの案を考え，それらの案に対して，「実現可能か」，「実現するとしたらどのような材料を使うのか」，「製作期間はどのくらいか」などの具体的なところを考えていった。そして最終的にはネットライト（植え込み，木の下），ストリングライト（木に巻き付けるもの），投光器（大学石碑・横断幕を照らすもの），インフレータブル雪だるま（内部に LED ライト），ペットボトルツリー，文字オブジェ，ハートのオブジェ，ボール型イルミネーション，山口の SL・山口大学のキャラクター「ヤマミィ」のデザインのイルミネーションに決まった。

⑵ 材料の発注

最終的な案が決定した後はそれぞれのイルミネーションの材料の発注に取りかかった。若干の遅れが発生したが，およそ 10 月中旬から 11 上旬のうちには発注作業が完了した。

⑶ イルミネーションの加工

本プロジェクトに割り当てられた予算内で上記のイルミネーションを完成させねばならず，どうしても最安値の商品になってしまい，防水加工等が不十分であったため，自分たちで防水作業を行った。

（防水作業の様子）

また，SL・ヤマミィのデザインのイルミネーションに関しては昨年まで使用していたものを新調したためそれらの加工作業を行った。その他にもハートのオブジェの枠の部分（イレクター）の加工作業やボール型イルミネーションの加工，ペットボトルツリーの加工なども行った。

⑷ イルミネーションの取り付け

イルミネーションの取り付けは 11 月下旬から急ピッチの作業で行った。最初に木に巻き付けるストリングライトから取り付けを行った。

（木に巻き付けるストリングライトの取り付け）

木に登る危険を伴う作業のため，常に木の下に人を配置するなど安全面を徹底しながらの作業を行った。一方で安全面を気にしつつも見栄えをよくするために，なるべく高い位置や枝の先までライトを巻き付けることを意識した。ストリングライトと並行して植え込みにネットライトを取り付けた。ネットライトは風などにより飛んでいかないように，また，風であおられた際に断線してしまわないように固定した。そのほかのイルミネーションについては出来上がったものを正門に運び込み設置した。

４．１．２点灯期間

点灯期間においては，主に⑴各イルミネーションの点検，⑵電源が届かない場所に使用したバッテリーの残量確認を行った。

⑴ 各イルミネーションの点検

イルミネーション点検チェックシートを用いて各イルミネーションに不備や異常がないか点検した。

⑵ 電源が届かない場所に使用したバッテリーの残量確認

消灯（21 時）の時点でバッテリーの残量が 50%を切っていた場合，充電し浴室の 17 時までにもとに戻していた。

４．１．３撤去期間

撤去期間においては最初に目に見て目立つもの（ハート形のオブジェ，ペットボトルツリー，雪だるま，横断幕，SL・ヤマミィのデザインのイルミネーション）を中心に撤去を行った。これらは固定に使用したものを外す作業のため比較的スムーズに終わったが，大きさがあるため持ち運びに苦労した。現在は無事に契約している賃貸アパートに保管している。次に取りかかったのは，ストリングライト・ネットライトの撤去である。ネットライトは固定に使用したものを外せばよいので比較的簡単にできたが，ストリングライトは取り付け時と同じく木に登りながらの作業であったため危険を要した。常に 1 つの木に対して 2 人以上を配置し，安全管理を徹底した。

４．２防長交通山口営業所「クリスマスバス」装飾

防長交通山口営業所様にご協力いただき，例年 12 月に走行している「クリスマスバス」の装飾を本プロジェクトにて行わせていただくことが出来た。この「クリスマスバス」は例年 12 月に走行しておりバスの内部をクリスマス仕様に装飾していた。本プロジェクトではこの「クリスマスバス」をよりパワーアップさせることを目標として取り組んだ。主な取り組み内容としては，先ほど記した山口大学吉田キャンパス正門イルミネーションと同じである。

４．２．１準備期間

準備期間においては，主に⑴イルミネーションの装飾内容の決定，⑵材料の発注，⑶イルミネーションの加工，⑷イルミネーションの取り付けを行った。

⑴ イルミネーションの装飾内容の決定

話し合いの進め方は山口大学吉キャンパス正門イルミネーションと同じため省略する。最終的な案としては，動く雪だるま，提灯型イルミネーション，天井にぶら下げるイルミネーション，これらに加えてその他装飾も行うということで案だしは終了した。

⑵ 材料の発注

山口大学吉田キャンパス正門イルミネーションと同じため省略する。

⑶ イルミネーションの加工

バスの車内のため防水作業は必要なかったが，各イルミネーションの加工を行った。動く雪だるまについては本体に発泡スチロール，固定に木の板など使用した。

（雪だるま製作の様子）

提灯型イルミネーションは乗客の邪魔にならないようになるべく高い位置に設置する・小さくするという条件のもと加工を行った。天井にぶら下げるイルミネーションについては，乗客の邪魔になりかねないという理由から設置が危ぶまれたが，ネットを付けて垂れないようにするという条件のもと加工を行った。

⑷ イルミネーションの取り付け

イルミネーションの取り付けに関しては走行日の前日の 11 月 30 日でしか行うことが出来ず，急ピッチの取り付け作業を行った。それぞれ安全面を第一に考えながら見栄えをよくするように工夫して取り付け作業を行った。

４．２．２点灯期間

点灯期間においては，異常等があれば報告していただく形をとり，12 月 1 日～12 月 25 日の期間，市内を走行していただいた。

４．２．３撤去期間

撤去期間においては，12 月 26 日のクリスマスバスの走行終了日の翌日に撤去作業を行った。

５．反省点

本年度の活動を通じて，いくつかの課題が明らかとなった。まず，イルミネーションの装飾に使用する資材の発注が一部遅れたことにより，製作・取り付け作業がタイトなスケジュールとなり，メンバーの負担が大きくなってしまった点が挙げられる。来年度以降は，スケジュール管理をより厳密に行い，余裕をもった計画立案と実行が求められる。

また，安全管理に関しても，木に登っての作業やバス内での高所作業など，危険を伴う場面があったため，事前のリスク管理や必要な安全対策の徹底が必要であると感じた。

さらに，外部関係者との連携において，情報共有や進捗報告がやや不十分な場面もあったため，今後はより円滑なコミュニケーション体制の構築を図っていきたい。

６．感想

本プロジェクトを通じて，「山口がクリスマス発祥の地である」という地域の誇りを多くの方に伝えることができたことは，非常に大きな達成感をもたらした。学生主体で企画・準備・実施までを行う中で，チームで協力しながらひとつの形を作り上げる経験は，貴重な学びとなった。

また，地域住民の方々や観光客の方からいただいた温かい言葉や笑顔に触れ，私たちの活動が少なからず地域の活性化に貢献できたのではないかという実感を得ることができた。

今回の経験を通して得た知見や反省を今後の活動に活かし，より多くの人に山口の魅力を伝えられるよう努めていきたい。

野球好き，いや野球大好き～中学生のための交流会～

―SIGMA―

代表者　　梅田晃大（理学Ｂ１年）
構成員　　江谷稟空（理学Ｂ１年）小林千加史（理学Ｂ１年）佐々木未来（理学Ｂ１年）
中川真優（理学Ｂ１年）箱田真央（教育Ｂ１年）
林彪斗（理学Ｂ１年）林宗明（理学Ｂ１年）
迎山日那（教育Ｂ１年）

１．プロジェクト概要

部活動の地域移行が令和 8 年から本格始動するにあたり，地域移行期間に部活動で活動するはずであった中学生やその保護者，教育現場の先生から，これから先の部活動について困惑した声があげられる。友人と練習してきたことの発表する場や他校との試合，地方大会や全国大会の実施等が行われるのかといった不安の中で活動する多感期の中学生のストレスは計り知れないものと考えられる。

私たち SIGMA は，部活動の中でも「野球」に焦点をあて，山口市における部活動の地域移行の現状を調査するとともに，野球が大好きな中学生や小学校 6 年生を対象とした交流会を開き，「安心して野球ができる環境が山口市にはある」といった意識を構築することを目標として活動した。

様々な地域の選手が交流を深め，技術力の向上だけでなく，仲間意識や協調性を高め，将来の野球界や地域活動・地域教育に貢献できる人材の育成，山口大学に進学し多方面に活躍する人材の育成をする場として位置付けた。

２．プロジェクトの背景・目的

このプロジェクトを始動させた背景には，代表の梅田が過去に経験した「野球を諦める」という決断が大きく関係している。

代表の実兄が野球をしていたこともあり，代表は小学校 3 年生から地域の少年野球チームで野球を始め，少年野球ではキャプテンを務め，中学校時代には県大会ベスト 8 などの成績を修めた。いつからか高校に進学後も野球を続けることが当たり前で，「甲子園に出場すること」が目標となっていた。

しかし，代表には「学校教員になる」という目標もあったため，将来のことを優先し，野球部のない高校に進学することとなった。この「野球を諦める」という決断は，代表の人生で初めての大きな決断であり，同級生が球場で活躍している姿を見ることは苦しいものだった。

これらの経験から，「“環境”のせいで野球を諦めてほしくない」と考えるようになった。その頃，全国で部活動の地域移行に関する情報が注目されるようになり，部活動の地域移行という環境でスポーツを諦める中学生がいてほしくないと思い，「野球好き，いや野球大好き～中学生のための交流会～」プロジェクトを立ち上げ，SIGMA として活動をスタートさせた。

３．活動方法

山口市教育委員会や部活動地域移行推進室，山口市内の中学校教諭からの情報をもとに，山口市内の中学生と小学校 6 年生を対象とした野球イベントや交流会を開催した。

対象とした中学生や小学校 6 年生が多く参加してくれる可能性の高い休日にイベントを実施し，平日にはミーティングを行い，イベントに向けた緻密なスケジュール調整を行った。

また，全日本軟式野球連盟学童部の大会で広報活動やアンケートを実施し，部活動地域移行に対する意見を SIGMA の活動に反映した。

４．活動内容

「野球好き，いや野球大好き～中学生のための交流会～」プロジェクトで SIGMA が実施した活動は以下のとおりである。

４．１吉敷少年野球団 練習

8 月 31 日（土）に山口市立良城小学校グラウンドに訪問し，吉敷少年野球団の練習に参加した。

吉敷少年野球団は代表・梅田が所属していた少年野球チームであり，伝統ある少年野球チームである。長年にわたり地域の子どもたちに野球を通じて，礼儀とマナーの大切さやスポーツの楽しさ，チームワークの大切さを伝えてきたチームであり，プロ野球選手も誕生した。

今回は，練習中にバッティング練習の指導やノックを打たせてもらい，“指導”をする貴重な経験をさせてもらった（図 1）（図 2）。子どもたちは一生懸命に練習に取り組んでおり，その真剣な眼差しから野球に対する熱意が強く感じられた。また，選手同士が声を掛け合い，励まし合う姿からは，チームワークの良さが伺えた。

指導の際には，バッティングフォームの基本やスイングのタイミング，守備位置での姿勢など，細かな点にも注目し，子どもたちが理解しやすいように丁寧に説明を行った。選手たちは積極的に質問をしてくれ，上達したいという意欲が伝わってきた。

練習中や練習後に，選手たちや指導者，保護者の方々とお話することができ，野球に対する思いや私たちが焦点をあてている「部活動の地域移行」について意見交換ができた。地域に根付いたチームならではの温かい雰囲気に触れ，非常に有意義な時間を過ごすことができた。

図 1 バッティング練習中の様子

図 2 ノック中の様子

４．２山口市立宮野中学校 練習

9 月 9 日（月）に山口市スポーツの森 第 2 球場に訪問し，山口市立宮野中学校野球部の練習に参加した。

山口市立宮野中学校の野球部顧問は山口大学卒業生の教諭が務めており，快く練習への参加を許可していただいた（図 3）。中学生の練習に参加するのは SIGMA として初めての経験であり，最初は緊張したものの，次第に雰囲気に馴染み，楽しみながら練習に取り組むことができた（図 4）。

練習では，キャッチボールやシートノック，バッティング練習など，さまざまなメニューに参加した。中学生ならではの体力や技術レベルの高さに驚かされる場面も多く，大学生にとっても学ぶことが多い時間となった。また，選手たちが練習中に積極的にコミュニケーションを取り，互いにアドバイスし合う姿が印象的であった。

指導の中では，特に基礎の重要性を強調し，基本動作を繰り返し確認することの大切さを伝えた。選手たちの真剣な顔から，自らのプレーに取り入れようとする意欲が感じられ，非常に充実した指導の時間となった。

練習後には，顧問の教諭とこれからの野球界，部活動についてお話をし，教育現場の声を聞くことができた。

図 3 ノック中の様子 （ノッカー：教諭）

図 4 ノック中の様子（連携プレー）

４．３大内中野球クラブ エキシビジョンマッチ

10 月 27 日（日）に山口高校グラウンドで，大内中野球クラブとエキシビジョンマッチを行った（図 5）(図 6)。

大内中野球クラブは部活動地域移行を既に取り組んでおり，山口市立大内中学校に通う生徒が野球部と併用して活動している。私たちが焦点をあてている部活動の地域移行に取り組んでいる団体と交流する機会をいただき，多くの学びを得た。

試合では，選手たちが日頃の練習の成果を発揮し，互いに競い合いながらも楽しんでプレーする姿が見られた。特に，試合中にお互いに声を掛け合い，ミスをしても励まし合うなど，チームワークの良さが際立っていた。また，選手たちが全力でプレーする姿からは，野球に対する情熱が強く伝わってきた。

試合後には，両チームが一緒にノックを行い，大学生と中学生が野球というスポーツで時間を共有することができた。

試合の結果は，4 対 5 で山口大学の負けに終わった。また機会があればリベンジをしたい。

図 5 山口大学 SIGMA 集合写真

図 6 山口大学 SIGMA 打撃

４．４少年野球 交流イベント

11 月 24 日（日）に山口大学野球場で少年野球交流イベントを開催した（図 7）。

山口市内の野球少年がキャッチボール，ノック，エキシビジョンマッチ，ベースランニングに取り組んだ（図 8）。特に印象的だったのは，普段敵チームとして対戦していても，皆が仲良くプレーをしていたことである。試合中や練習の合間にも笑顔が絶えず，互いに声を掛け合いながら楽しんでいる姿が見られた。

イベントを通じて，子どもたちが野球の技術だけでなく，チームワークや他者との交流の大切さを学んでいることを実感した。また，部活動の地域移行に際して，野球少年の活躍の場が減少することは絶対にあってはいけないと感じた。

今回の交流イベントは，野球というスポーツを通じた繋がりを再認識する貴重な機会となった。

図 7 円陣の様子

図 8 ノック開始前の様子

４．５徳地野球スポーツ少年団 野球教室・第 2 回野球教室

1 月 18 日（土）と 3 月 8 日（土）に徳地野球スポーツ少年団と野球教室を開催した（図 9)。

徳地野球スポーツ少年団は少人数ながらも，野球ができる環境に感謝することや道具を大切にすることなど，礼儀を大切にしながら活動している。

初回の野球教室では山口市立徳地中学校に訪問し，第 2 回野球教室では山口大学に来校してもらい開催した。両日とも SIGMA が考えた練習メニューで，基本的なキャッチボールやバッティング練習，守備練習など多彩なメニューを通じて技術の向上に取り組んだ（図 10)。

子どもたちが一生懸命に話を聞き，実践しようとする姿が印象的であった。また，第 2 回の教室では山口大学の環境を体験してもらうことで，子どもたちにとって新鮮で刺激的な機会となった。

どちらの野球教室でも，子どもたちだけでなく，大学生指導者や保護者も楽しみながら練習に取り組んでいる様子が見られ，スポーツを通じた交流の重要性を再確認することができた。

図 9 練習中の円陣

図 10 練習中の様子

５．感想

【代表】梅田 晃大

山口大学に入学して 2 か月経ったある日，部活動の地域移行のニュースが情報番組で取り上げられ，「全国で部活動がなくなる」ことは中学生にとってマイナス面しかないと思い，「クラブチームを設立して，安心して野球ができる環境を整えたい」と友人に話をしました。その時に「山口大学にはおもしろプロジェクトというものがあって活動を支援してくれる」との情報を聞きました。その情報を教えてくれた人こそ，副代表の江谷稟空くんです。

その後すぐに，自主活動ルームへ行き，石井コーディネーターに想いを聞いていただきましたが，おもしろプロジェクト 2024 年の締め切りはとっくに過ぎていました。来年こそ申請してプロジェクトを始めようと考えつつも，すぐに行動できないことにすっきりしない心持ちでした。

それから 1 ヵ月後に，石井コーディネーターから「おもしろプロジェクト 2024 年二次募集をする」ことを教えていただき，二次募集採用団体として活動をスタートさせました。

私はこの一連の流れを運命だと感じています。たまたまニュースを見ていたら興味・関心のある内容のものに出会い，たまたま一緒にいた江谷くんからおもしろプロジェクトの存在を教えてもらい，たまたまおもしろプロジェクトが二次募集を開始した。それだけでなく，おもしろプロジェクトの掲示板には，私の恩師の先生が写っており，おもしろプロジェクトを経験されていました。偶然とは思えないほどの偶然が重なり，活動することができました。

野球は 7 割失敗するチームスポーツです。その中でチームがどのように得点を重ねていくのか，どのように点を取られないようにするのかが重要です。私たち SIGMA も「失敗しても OK！！みんなでカバーしよう」といった想いで活動して参りました。

今年度の活動を振り返ると，私は多くの失敗をしながらも，多くの方のご支援があって活動をやりきることができました。石井コーディネーターや支援教員の辻多聞先生，学生支援課尾川さん，イベントに参加してくださった皆さん，そして何より SIGMA のみんな，本当にありがとうございました。

【副代表】江谷 稟空

この活動を通じて，私は，多くの人を楽しませることの良さを実感することができた。私は野球経験者ではないが，部活動の地域移行に伴い，「中学生がのびのびとプレーできる環境を整える」という目標のもと活動する中で，支える側としての大切さを学んだ。

最初は，野球に詳しくない自分になにができるか分からず，不安を感じることもあった。しかし，グラウンドの整備や運営のサポート，練習環境の改善といった形で関わるうちに，実際にプレーする人だけでなくそれを支える人の存在も重要であると気づいた。例えば，練習が円滑に進むように準備を手伝ったりすることで，子どもたちが集中してプレーできる環境が整い，それが彼らの楽しさにつながることを実感した。

また，選手たちが生き生きとプレーする姿を見るたびに，スポーツが持つ魅力を改めて感じることができた。子どもたちが試合や練習の合間に交わされる笑顔を間近で見ることで，サポート側として私自身も大きなやりがいを感じるようになった。直接プレーしなくても，スポーツを通じて多くの人達が楽しく，充実した時間を過ごせるように支えることは大きな意味があるのだと学ぶことができた。

この経験を通じて，「自分にできる形で誰かを支え，楽しませること」の大切さを知り，今後もこのような活動に関わっていきたいと強く思うようになった。これからも，多くの人が楽しくスポーツに取り組める環境を作るために，できることを模索し続けていきたい。

【会計】小林 千加史

SIGMA の一員として，経験したことのない野球というスポーツに関わった。最初は不安もあったが，子どもたちの熱意や成長する姿に触れる中で，スポーツが持つ力の大きさを実感した。私たち自身も多くの学びを得ることができ，これからもスポーツを通じた地域貢献に取り組んでいきたい。

この活動を通じて，単に技術指導をするだけでなく，子どもたちの成長や笑顔，仲間との絆に触れることができたのは何にも代えがたい経験であった。これからも部活動の地域移行や地域のスポーツ活動に積極的に関わり，子どもたちが夢や目標を持ち，それに向かって努力できる場を提供し続けていきたい。

【広報】佐々木 未来

今回，おもしろプロジェクトにおいて，「SIGMA」での部活動の地域移行に関する活動に携わりました。

今回の活動を通して，教員の部活動での土日出勤が問題視され，部活動の地域移行が推奨されている中での問題点や地域住民との関わり方について考えることが出来ました。

まず，部活動の地域移行においての地域との関係の重要性を感じました。数年前からのコロナ禍の影響もあり，コロナ禍以前と比較して，地域住民と学生，児童の関わりが減少していると感じました。その中で部活の地域移行を進めるにあたって，地域住民と関係を深めることの重要性を再確認することが出来ました。地域住民と協力して児童に対し，指導やスポーツをする場を提供することで，児童の体づくりやスポーツに対する姿勢，思いに繋がるのだと実感しました。

また，学生の立場からこの活動に参加することで，地域社会への学びを得ることができ，自分自身の成長に繋がったと感じました。スポーツ少年やその関係者の方々と直接関わる中で，テレビやニュースで得ていた新しい指導体制の情報と，実際の現場の声や不安な思いを理解することで，社会的な視野が広がったと感じました。

この活動を通して，「地域社会」について改めて考えることができました。地域社会とは，地域住民とコミュニケーションを大切にし，その上で協力，助け合いから成り立っているものだと実感しました。

また，地域社会に貢献するには何をすればいいのか自ら考え，行動することの重要性を改めて感じました。「おもしろプロジェクト」での活動は，学問と地域社会を繋げる貴重な経験でした。地域の人々との交流を通じて，スポーツの持つ力や地域活性化の重要性を実感し，今後の自分の社会的責任についても深く考える機会となりました。

【広報】中川 真優

今回，私は「野球好き，いや野球大好き～中学生のための交流会～」という中学生の部活動の地域移行に向けた活動に参加した。私が参加した理由として，将来中学校の教員になりたいという夢があったからである。今の日本の教員の課題である仕事量が多すぎることによる多忙について，少しでも教員の負担を減らすための取り組みとしてや，少子化への対応として，部活動の地域移行が全国的に取り上げられるようになったと思う。もし将来教員になった際に，部活動の地域移行が完全に行われたらどのようになるのか先取しておきたいと思い，このプロジェクトに参加した。

私は今回広報担当としてインスタグラムでの告知や活動報告を行った。部活動の地域移行がどのようなものか実感できていない中学生やこれから中学生になる小学生，そして保護者の方々にとって，インスタグラムという多くの方が目にすることができる SNS で情報を発言することによって，心替えができたことや，より多くの人に関心を持ってもらうことができたと思う。今後も，広報活動を通じて，部活動の地域移行に関して関心をもってもらえるよう活動していきたいと思った。

最後に，このような素晴らしい機会を与えていただき，心から感謝申し上げます。

【コーチ】林 彪斗

SIGMA の活動を通して，野球がもたらす影響が多くあることを実感した。特に，徳地野球スポーツ少年団との野球教室では，少ない人数ながらも，どのようにしたらチームとしてレベルが高くなるのかを考えていた。ここでのレベルは，野球の技術だけでなく，人間性も大きく関わっている。

来年度からも継続して，活動に取り組もうと思う。

関わってくださったすべての皆様に感謝申し上げます。

【コーチ】林 宗明

今回のおもしろプロジェクトを通して，多くのことを学べ，経験できた。

自分の今回参加したおもしろプロジェクトは，地元の子供達に野球を教えることを通して，地域交流を図るものだった。

今回は 2 つのチームで合同でやり，お互いのチームに野球を教えると同時にその 2 チーム同士の交流も深めた。自分は野球経験者ということもあり実際に子供達と練習，指導をした。

今回のおもしろプロジェクトに参加して良かったことは，最近の子どもと関われたことだ。自分は将来教師を目指しているが，大学生のうちに子どもと関わる経験などまずない。今のうちに子供達と関わることができるのは将来大きなアドバンテージになる。実際に，小学生と会話をすると，自分の中の子どものイメージと大きな差がありギャップを感じた。

また，指導の難しさを感じた。自分の中での伝えたいことと，実際言葉にして相手に伝わることでは差が生まれ，伝えたいことが伝わらなかったりするのを実際に感じた。これを経験できたのはすごくいいと思った。それに，大学に入ってから運動不足であったため，定期的に一日中動く日ができるのはありがたかった。

自分は，今回のおもしろプロジェクトで学んだ様々なことを，実際に自分が就職したときに活かしていきたいと思った。

Bamboo.01

－takecreation－

代表者　　中原陸（工学Ｂ３年）
構成員　　古嶋由詩（工学Ｂ３年）増本祥太（工学Ｂ３年）

1．背景と目的

近年，日本各地で問題となっている放置竹林は，竹の管理放棄による拡大が進み，在来種の植生破壊，生態系の変化，景観の劣化を引き起こしている。かつては農業資材や生活用品として重宝されていた竹だが，現代の生活スタイルでは需要が減少し，伐採・管理が行われなくなっているのが実情である。

本プロジェクト「Bamboo.01」は，そうした未活用資源である竹に新たな価値を与えることを目的にスタートした。竹という自然素材の構造的可能性に注目し，ものづくりを通じてその再評価と活用を試みた。特に，本プロジェクトはアートやクラフトに留まらず，実用性を備えた什器やスツール，将来的にはパビリオンなどへの展開を視野に入れている。

活動を進めるにつれ，素材としての竹の特性のみならず，その素材をいかに構造的に扱うか，そしてそれをいかに接合・構成するかという点に強い関心が移っていった。特に，張力と圧縮力の釣り合いによって成り立つテンセグリティ構造に着目し，自然素材でいかにこの構造を実現できるかという挑戦がプロジェクトの中心的テーマとなっていった。

２．計画と構想の変遷

活動初期には以下の段階的な進行を想定していた。それは竹の調達と処理（収集・乾燥・油抜き），テンセグリティ構造を活かしたスツール制作，パビリオンや展示什器への応用展開である。

竹は天然素材ゆえに径や節間，曲がりなどに個体差が大きく，テンセグリティ構造のような力の均衡に高度な精度を要する構造においては，施工上の困難が浮き彫りになった。特に，Grasshopper による構造設計のなかで，部材長や結節点の精度が安定した構造の成立に極めて重要であることが確認された

このような理由に加え，山口県における県産材活用の歴史的背景と現在の取り組みを踏まえ，展示什器制作においては山口県産の檜角材を採用するに至った。県産檜は成形性・寸法精度・乾燥度・強度面においてテンセグリティ構造に適した特性を有しており，地域資源の再評価と持続可能な建築材活用の観点からも高い意義がある。

そのため，本プロジェクトは「Bamboo.01」というプロジェクト名を持ちながら，竹も檜も活用してむしろ，構造や施工の検討の面白さを追求するプロジェクトとなった。

３．活動の記録

8 月には，プロジェクト名「Bamboo.01」，グループ名「takecreation」として新たに活動を再構築し，放置竹林問題への応答としての竹の利活用を出発点にしながらも，アート性よりも構造性・汎用性に重きを置いた方向性に進んだ。テンセグリティ構造に関心を持ち，スツール案として導入し，Rhino+Grasshopper を用いた設計スクリプトも開発した（図 01，図 02）。

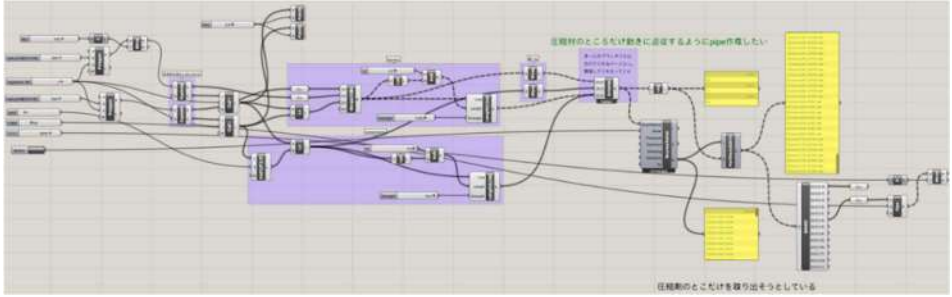


図 01　テンセグリティ構造を用いた竹スツールのデザイン案のスクリプト

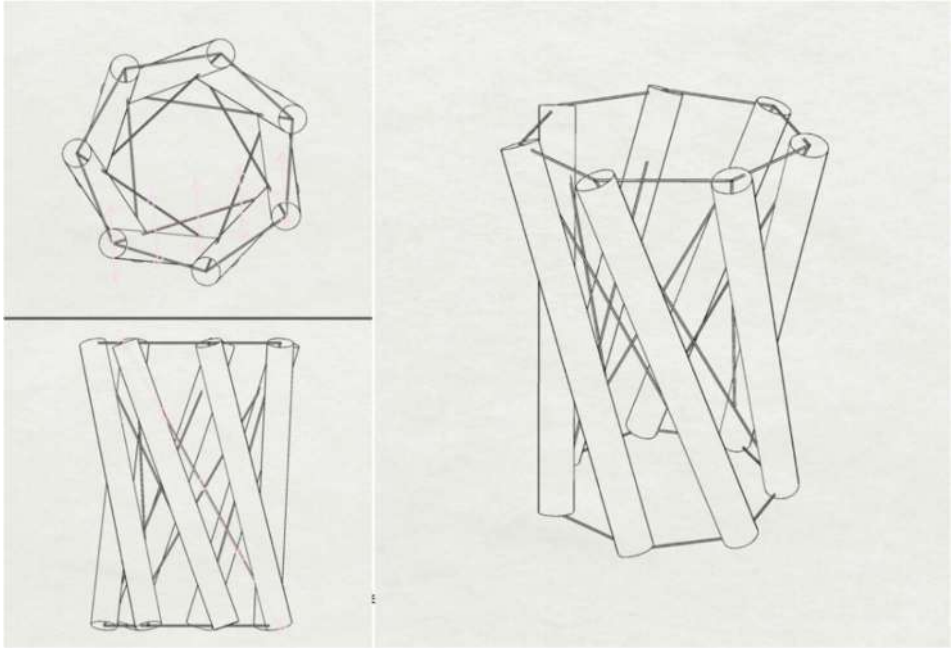


図 02 スツールの最終案

9 月は，徳山工業高等専門学校から細い径の竹を譲り受け，太い径の竹は，竹林での伐採作業を行い，油抜き処理を行った。油抜きによって防虫・防腐効果とともに光沢ある仕上がりが得られた（図 03）。

図 03　切り出した竹(上)と油抜き後の竹(下)

10 月には徳山工業高等専門学校にて過去の竹パビリオンを見学し，施工性や素材の扱いについて学んだ。

11 月は，ワイヤーの接合方法においてオーバルスリーブ（圧着タイプ）を試行。接合部を竹内部に納める設計を採用（図 04）し，視覚的軽快さと構造的安定性を両立させた。一方で，竹の品質の不安定性などによる施工上の限界を感じた。

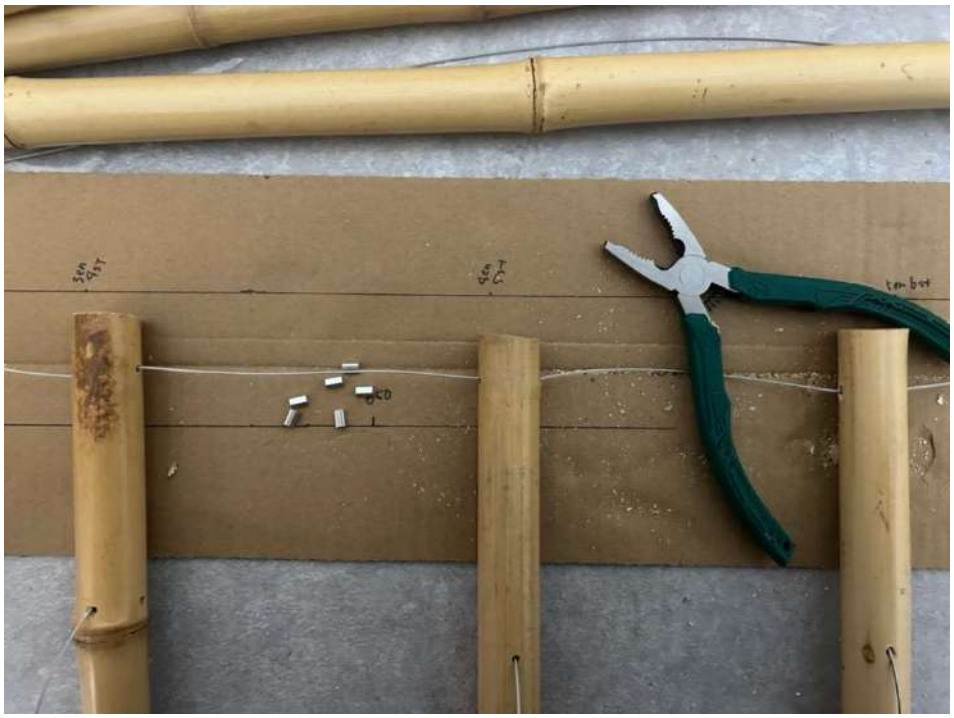


図 04　接合部を竹の中に仕舞う

12 月には，県産の自然素材かつ，品質の安定が見込める檜を活用した什器の制作に活動の軸をシフトした。Grasshopper で形状や高さを調整しながら，ニューバランスシューズ展示用テンセグリティ什器を完成させた。2 月に「田中智之の解体新書展」（図 05）にて実装することを目指し，ミニマルな線構成と自然素材によって，展示コンセプトとの整合を図った。接合箇所は 2 つに限定し，仕口形状を共通化することで施工性も高められた（図 06）。

図 05　実際に 2 月に「田中智之の解体新書展」で活用された什器

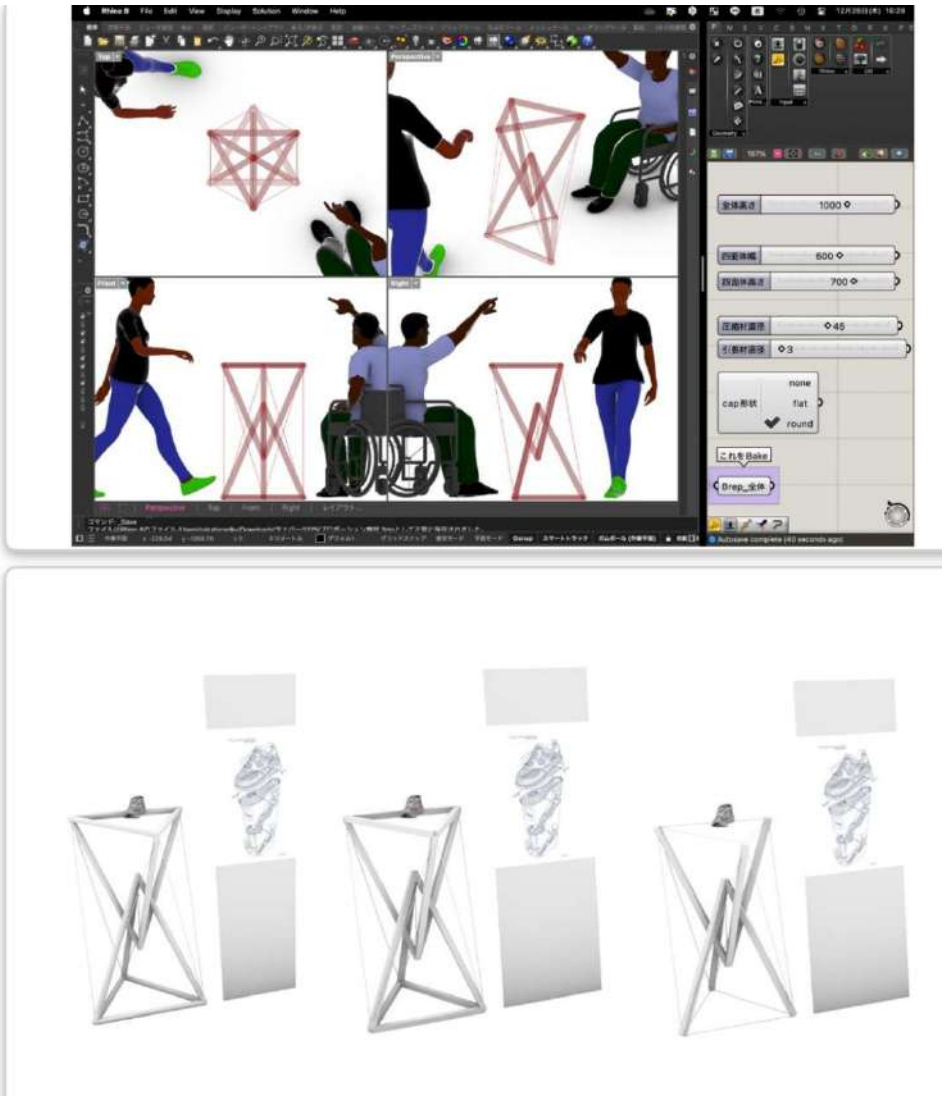


図 06　什器の検討過程

1 月は，檜材を用いた最終什器において，金物や合成接着剤を用いずに伝統技法「蕪束（かぶらづか）」を応用した接合（図 07）を実施。膠（にかわ）を接着剤とすることで，素材一貫性と環境配慮を両立した。展示（図 08）は成功裏に終了し，軽快さ，構造安定性，施工性において高く評価された。

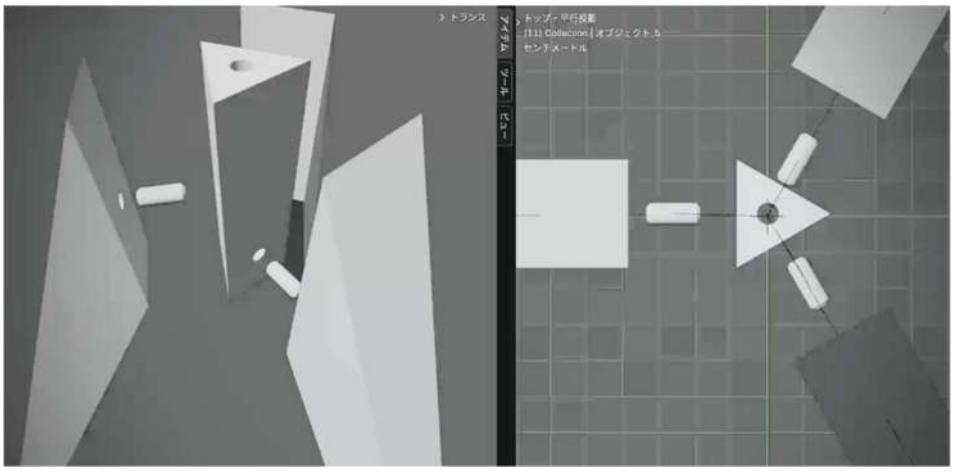


図 07　仕口形状

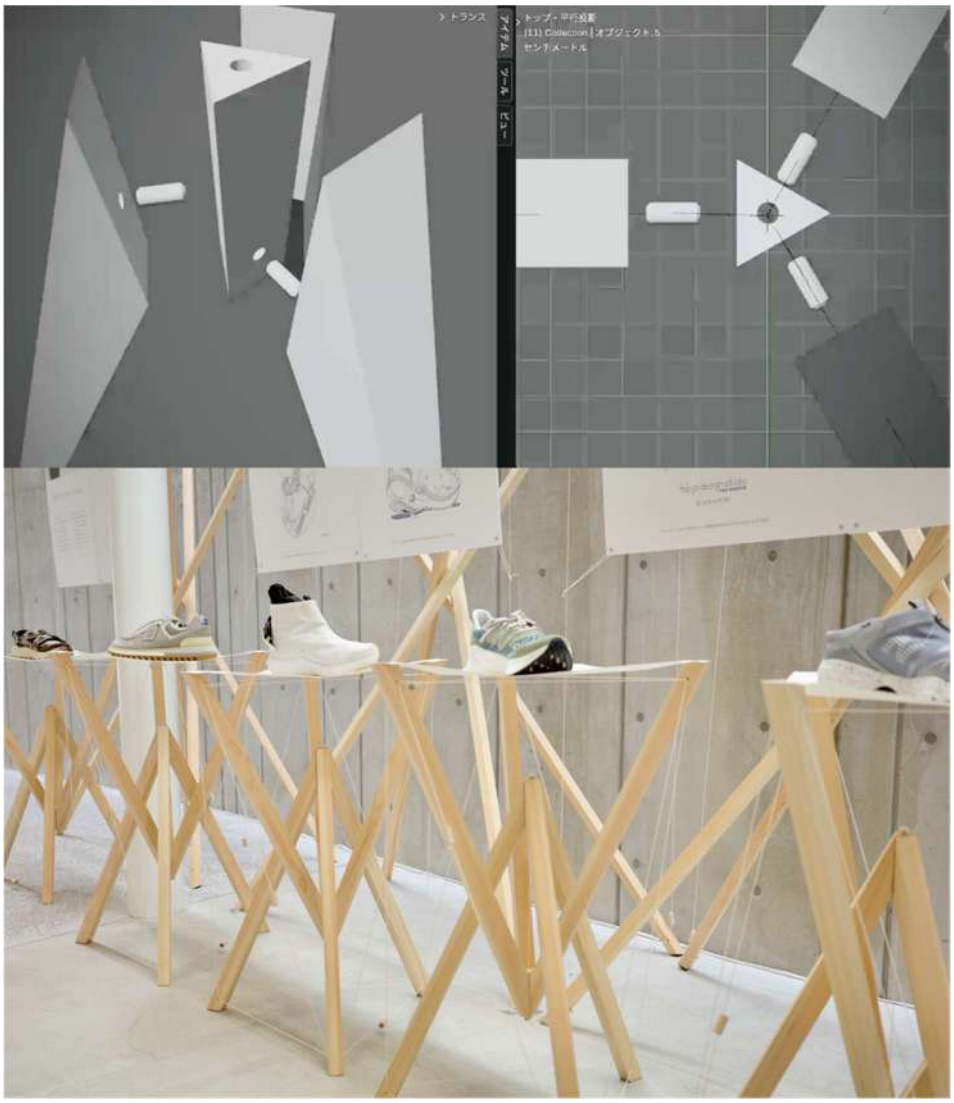


図 08　活躍中の什器

2 月は，竹を用いたスツール制作を目標とし，テンセグリティ構造ではなく，単に竹同士を圧着させる方法で完成させた。竹の長さを揃えて切り出し建築用のステンレスバンドを用いて緊結した（図 09）。意匠的な評価としては，工業的なステンレスの光沢と竹の素材感が馴染んでまとまっている印象が得られる。

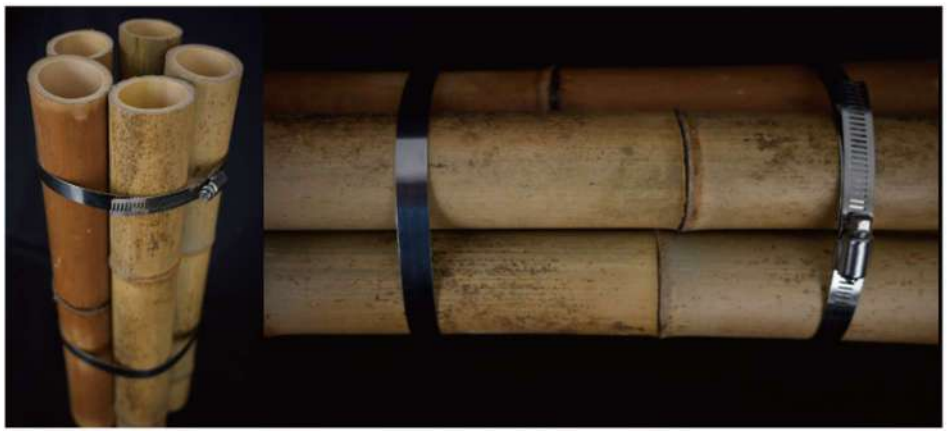


図 09 竹を建築用のステンレスバンドを用いて緊結した

４．研究的考察と工学的補足

プロジェクトの中で，8 月から 1 月までを通して検討してきたテンセグリティ（Tensegrity）構造は，圧縮材と張力材の釣り合いによって自立する構造であり，その設計には高い精度とバランス感覚が求められる（Fuller, 1961 より）。竹のような自然素材では，径の不均一性・曲がり・節などが構造上の不確定要素となり，特に接合部の精度が必要なテンセグリティ構造では，設計・施工上のハードルが高くなる。

一方，檜材は角材として断面寸法を揃えやすく，構造体として安定性を持たせやすい素材であった。テンセグリティのような精度重視の構造には極めて適しており，設計段階から施工段階への移行もスムーズであった。

ワイヤーの接合にはオーバルスリーブを用い，視覚的な軽快さを保ちつつ，構造的な信頼性も確保した。最終段階では，蕪束を応用した伝統的な木工技術により，金物を使わずに接合する技術的成果も得られた。Grasshopper によるパラメトリック設計は，部材の角度や高さ調整，張力バランスの検証などにおいて極めて有効であった。

５．成果と今後の展望

完成したテンセグリティ構造什器（檜材）は，展示什器としての実用に耐えうる精度と美観を兼ね備えており，すべて自然素材（檜，たこ糸，和紙，膠）で構成されている。

一方，竹材を用いたテンセグリティスツールは構造的検討を継続中であり，素材特性を活かした接合技術や施工手法の確立を目指している。

本プロジェクトを通じて得られた知見は，素材の可能性と限界，構造成立の条件，接合技術の工夫，施工を見据えた設計といった，建築・ものづくりにおける根源的な問いに関わるものである。

今後は，竹の不均一性を逆手に取った構造，軽量化やモジュール化による応用展開なども視野に入れており，「素材と構造，構造と人，自然と技術をつなぐ」活動として，takecreation の探究はさらに継続されていく。